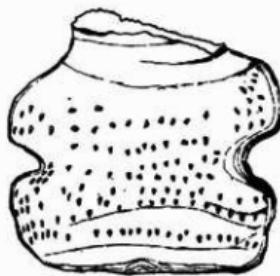


東大阪市遺跡保護調査会年報

I



1975

東大阪市遺跡保護調査会

序 文

今回出版することになりました東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰは、当調査会が昭和47年に発足して以来調査してまいりました遺跡の報告のうち、昭和48年までに調査を行なった鬼塚遺跡、岩田遺跡、上六万寺遺跡の三遺跡の報告をまとめたものであります。

また、昭和49年に調査を行なった遺跡に関しても年報のⅡとして近い将来刊行する予定であります。

今後、当調査会は調査を行なった遺跡に関しては、できるだけ早い時期に報告書を刊行するということを目指し進んで行きたいと考えております。

当調査会としましては、初めての試みでありますので充分なものとはいえませんが、この年次報告が研究者諸氏のお役に立てれば幸いと思います。

終わりにあたり、この年次報告作成にあたって御協力いただいた多くの方々に心より感謝の意を表します。

昭和50年3月

東大阪市遺跡保護調査会
会長 政和美

例　　言

1. 本書は、東大阪市教育委員会の委託により、東大阪市遺跡保護調査会が昭和47年度、および昭和48年度に調査を実施した鬼塚遺跡、岩田遺跡、上六万寺遺跡の調査報告をまとめたものである。
2. 本書の三遺跡の報告のうち、鬼塚遺跡は宇本隆裕が、岩田遺跡、上六万寺遺跡は福永信雄が執筆した。
3. 本書に収載した遺構の実測図は、調査に参加した全員の協力によって作製され、遺物の実測図は、鬼塚遺跡が宇本隆裕、岩田遺跡、上六万寺遺跡は福永信雄、信定悦子が担当した。
4. 出土遺物のうち、土器の復元、および拓本は、川脇節子を中心に大谷大学学生伊東佳代子、樟蔭大学学生葛木高子、本田圭子の手によるものである。
5. 図版に収めた写真的うち、遺構写真はそれぞれの担当者が、遺物写真は上野利明の撮影によるものである。
6. 各報告のうち、挿図番号については、鬼塚遺跡は①.②、岩田遺跡は拓影のみ①.②、他は1.2、上六万寺遺跡は1.2とした。
図版中の番号については、各遺跡とも1.2とし、挿図番号と対照とした。
7. 各調査の事務は安藤紀子が担当し、原稿の浄書は勝田邦夫、川脇節子の協力を得た。
8. 本書の作成にあたって、次の諸機関、各氏より協力と援助を賜わった。明記して謝意を表する。

枚岡中学校、岩田公民分館、島津徳治郎、森田万治郎、田口丈太郎、都出比呂志、中村友博、荻田昭次、和田法子（敬称略）

本文目次

鬼塚遺跡

I 位置と環境	(1)
II 調査に至る経過	(3)
III 調査概要	(4)
IV 出土遺物	(6)
V 出土遺物のまとめ	(17)
VI 結び	(19)

岩田遺跡

I はじめに	(20)
II 調査概要	(21)
III 出土遺物	(23)
IV まとめ	(26)

上六万寺遺跡

I はじめに	(28)
II 調査概要	(29)
III 出土遺物	(33)
IV まとめ	(44)

図版目次

写真対照表

図版 1	鬼塚遺跡 調査地点全景	(3・4)
2	鬼塚遺跡 HO 3 地区遺物出土状況	
3	鬼塚遺跡 繩文式土器	(6)
4	鬼塚遺跡 土偶・弥生式土器	(7・8)
5	鬼塚遺跡 弥生式土器	(8)
6	鬼塚遺跡 弥生式土器	(8・10)
7	鬼塚遺跡 弥生式土器	(10)
8	鬼塚遺跡 弥生式土器	(11)
9	鬼塚遺跡 弥生式土器	(11)
10	鬼塚遺跡 弥生式土器	(11)
11	鬼塚遺跡 弥生式土器	(12)
12	鬼塚遺跡 弥生式土器	(12)
13	鬼塚遺跡 土師器	(13)
14	鬼塚遺跡 弥生式土器・土師器・須恵器	(13・16)
15	岩田遺跡 S.1 トレンチ南壁・西壁	(21)
16	岩田遺跡 S.1 トレンチピット群・瓦器小皿出土状況	(22)
17	岩田遺跡 円筒埴輪・平瓦	(24)
18	岩田遺跡 土師器・黒色土器・灰釉陶器	(25)
19	上六万寺遺跡 調査地点全景・第1トレンチ北壁	(29・30)
20	上六万寺遺跡 第1トレンチ西壁・第3トレンチ西壁	(30)
21	上六万寺遺跡 第2トレンチ石組井戸全景	(32)
22	上六万寺遺跡 第2トレンチ石組井戸内部・鉄釘出土状況	(32)
23	上六万寺遺跡 弥生式土器	(34)
24	上六万寺遺跡 弥生式土器	(34)
25	上六万寺遺跡 弥生式土器	(34・36)
26	上六万寺遺跡 弥生式土器	(36)

27	上六万寺遺跡	弥生式土器	(34・36)
28	上六万寺遺跡	弥生式土器	(37)
29	上六万寺遺跡	弥生式土器	(34)
30	上六万寺遺跡	弥生式土器	(34・38)
31	上六万寺遺跡	弥生式土器・須恵質陶器	(38・40)
32	上六万寺遺跡	土師質土器・瓦器	(41)
33	上六万寺遺跡	瓦器・礮器	(41)
34	上六万寺遺跡	瓦質土器・土師質土器	(40)
35	上六万寺遺跡	瓦質土器・土師質土器	(40)
36	上六万寺遺跡	瓦質土器・土師質土器・陶器他	(40)
37	上六万寺遺跡	砥石・鐵製品	(43)

挿図目次

鬼塚遺跡

- | | | |
|----|-----------|-------|
| 1 | 周辺地形図 | (2) |
| 2 | 調査地点平面図 | (3・4) |
| 3 | H.O.1断面図 | (5) |
| 4 | 縄文式土器拓影 | (6) |
| 5 | 土偶 | (7) |
| 6 | 弥生式土器・壺 | (8) |
| 7 | 弥生式土器・甕 | (10) |
| 8 | 弥生式土器・鉢 | (11) |
| 9 | 弥生式土器・高杯 | (11) |
| 10 | 弥生式土器・高杯 | (12) |
| 11 | 土師器・須恵器 | (13) |
| 12 | 弥生式土器・細頸壺 | (16) |

岩田遺跡

- | | | |
|----|-------------------|------|
| 13 | 周辺地形図 | (20) |
| 14 | Sトレンチ、S.1トレンチ断面図 | (21) |
| 15 | S.1トレンチ平面図 | (22) |
| 16 | 円筒埴輪拓影 | (24) |
| 17 | Sトレンチ、S.1トレンチ出土遺物 | (25) |

上六万寺遺跡

- | | | |
|----|-----------------|------|
| 18 | 周辺地形図 | (28) |
| 19 | 調査地点平面図 | (29) |
| 20 | 第1、第2、第3トレンチ断面図 | (30) |
| 21 | 石組井戸平面図 | (32) |
| 22 | 弥生式土器 | (39) |
| 23 | 弥生式土器甕・壺口頸部 | (36) |
| 24 | 弥生式土器底部 | (37) |
| 25 | 弥生式土器高杯 | (38) |
| 26 | 瓦質土器・土師質土器 | (40) |
| 27 | 瓦器・土師質土器 | (41) |
| 28 | 砥石・鉄製品 | (43) |

鬼 塚 遺 跡

目 次

I 位置と環境.....	(1)
II 調査に至る経過.....	(3)
III 調査概要.....	(4)
IV 出土遺物.....	(6)
V 出土遺物のまとめ.....	(17)
VI 結 び.....	(19)

例 言

1. 本調査報告は、東大阪市箱根町に所在する東大阪市立枚岡中学校の校舎建設に伴う鬼塚遺跡の発掘調査の概要報告書である。
2. 本調査は、東大阪市教育委員会の委託により、芋本隆裕、稻山數士を担当として当調査会が実施した。
3. 調査中は、東大阪市文化財保護委員荻田昭次氏から積極的な御教示を賜わった。記して謝意を表する。
4. 本文の作成にあたって、京都大学大学院中村友博氏から多くの御教示を賜わった。不完全ながら本遺跡の内容を公表することができたのも中村友博氏の御指導のおかげである。記して感謝の意を表する。

I 位置と環境

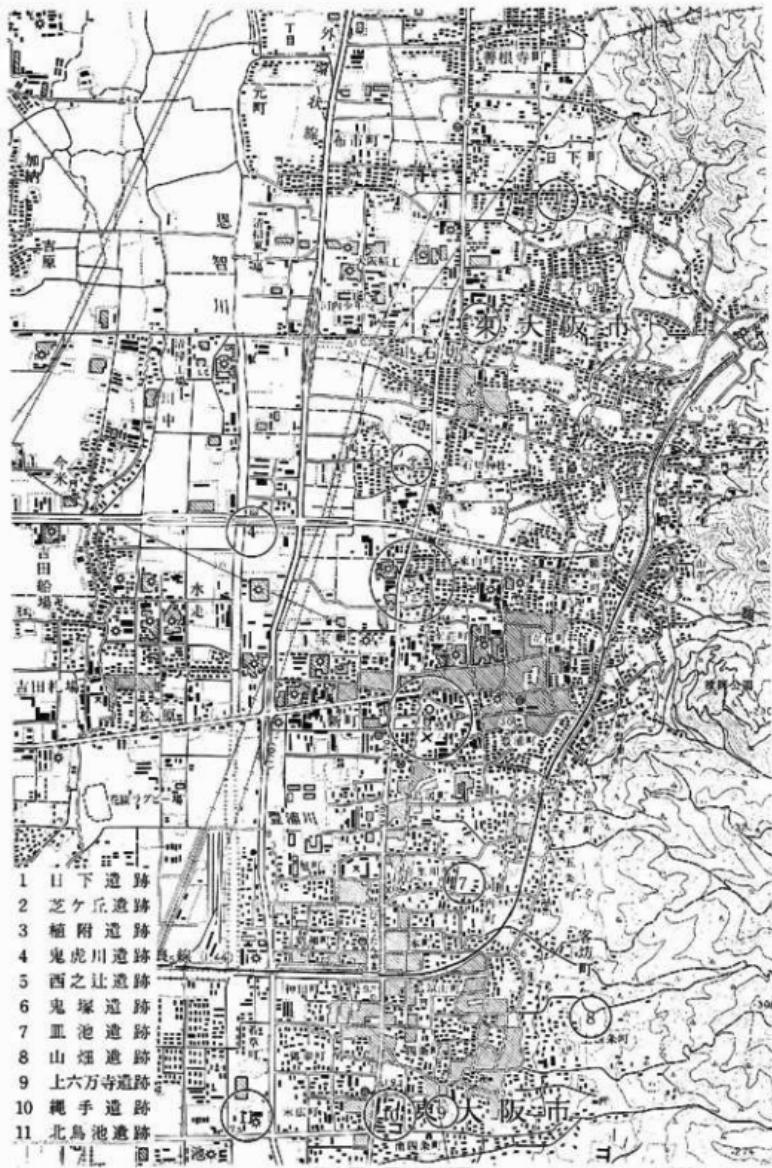
鬼塚遺跡は大阪府と奈良県を境する生駒山地の西麓、東大阪市箱田町鬼塚に所在する。

大阪側の西に急傾斜をもつ生駒山地の地形は、古生層を貫いた花崗岩塊から成る隆起準平原によって構成され、主峯の生駒山周辺だけが閃綠岩の残丘をなしている。

この大阪側の山麓には扇状地地形が一様にみられ、2、3の急傾斜面をもつ複合扇状地の形態をつくりだしている。このような地形の形成は、西麓斜面を流下する小河川と、山地を構成する地質の相互作用によって行なわれたものである。つまり、背後の山地が風化特性において、大きな岩塊から急に小さな細礫になり易い花崗岩から成っているために、西麓の急斜面を流下する小河川が出来時には一度に多量の土砂を押し出して扇状地性の地形を形成したものと考えられる。鬼塚遺跡付近の地形も急流性の小河川の一つである瀧池川の堆積作用によって形成された複合扇状地を呈しており、遺跡は下位扇状地の末端部に近い標高15~20mに位置している。

生駒山地西麓に存在する遺跡には、鬼塚遺跡と同様の扇状地末端部に位置するものが多く、遺跡分布は南北に点々と細長い連なりをみせている。これらの遺跡に記された人間の営みは、生駒西麓において縄文時代中期以後になると明確である。鬼塚遺跡の南方0.7kmに位置する楕手遺跡は、縄文中期に始まり後期前半に最盛を迎える集落址として著名である。また、後期には北方1.5kmに位置する日下貝塚が形成されている。楕手、日下貝塚が縄文後期に最盛期を迎えた遺跡とすれば、次の晩期には南方1.5kmに位置する馬場川遺跡が生駒西麓の代表的な遺跡としてあげられる。馬場川遺跡出土遺物は後期末葉から晩期前半にかけての土器と、多量の土偶、土版等の土製品を伴っている。特に、多様土製品と土器に凸帯文を有する類がほとんどない点は晩期前半に比定される馬場川遺跡の重要性を物語るものといえよう。このように、縄文後、晩期の生駒西麓地域は西日本における有数の生活基盤として各時期の代表的な遺跡を残している。ところが、弥生文化の波及とともに、集落の立地環境が平野の低湿地域に移ったために、扇状地上の遺跡からの遺物出土量は少ない。前期の土器が鬼塚のほか北方0.7kmに位置する西之辻遺跡と前記の楕手遺跡でわずかに出土しているだけで、中期の遺物もそれ程多くない。なお、南東0.5km、標高80mをはかる扇状地頂部には第Ⅲ様式から第Ⅳ様式の土器が出土した山地高地性遺跡があり、平野部の中前期遺跡とは好対照である。弥生後期になると、扇状地上の遺跡は再び増加し、西之辻遺跡を代表とする鬼塚、楕手、馬場川等の複合遺跡から土器の出土は多い。他に、後期の遺跡としては、瀧池の底浚えの際に土器が出土した皿池遺跡が南方0.5kmにあり、南西0.7kmの平野部には後期末葉に縄年される北島泊遺跡がある。

以上のように、生駒西麓の扇状地を中心とした地域には縄文時代から弥生時代にかけての各時期の遺跡が営まれているのであり、今回調査を行なった鬼塚遺跡も縄文後期~古墳時代にかけての複合遺跡の一つである。



第1図 周辺地形図

1 : 25000

II 調査に至る経過

鬼塚遺跡は、昭和35年枚岡電報電話局を建設する工事の際に出土した土器のなかに、縄文晩期船橋式と弥生前期古段階の土器が認められたことによって、縄文時代から弥生時代への過渡期にあたる遺跡として注目されるようになった。さらに、昭和40年に電報電話局の西方100mの地点で、枚岡農協の建設工事の際に船橋式の土器、および土偶が出土した。これら2度の発見は、いずれも工事中のことで、遺物は表面採集のために層位的な確認を伴わないのであった。その後、昭和43年に電報電話局北側の空地で工場建設に伴う事前調査が東大阪市教育委員会を主体として行なわれた。発掘調査の結果、地表下1mの黒色土層から弥生時代後期後半の壺⁽¹⁾が2個体検出されたほか、弥生中期、後期、小岩江北期等の土器が出土した。さらに、下層の黒色粘土層からは、弥生時代前期の壺、甕、鉢、蓋が出土した。弥生前期の壺は、昭和35年に出土したものと同様の木葉文を有する前期古段階に属する類であった。また、弥生前期の甕と縄文晩期船橋式の深鉢とが同一の包含層より出土することが確認され、船橋式と弥生前期古段階とは時間的に併行するという考え方の一資料を提供したのである。こうして、鬼塚遺跡は縄文時代から弥生時代に移る過渡期の複雑な文化要素を内在した遺跡であることが判明し、遺跡保存の面からもその正確な範囲の究明はますます急務を要する問題となりつつあった。

今回の調査対象地となった枚岡中学校は、近年の都市化に伴う年々の生徒数の増加に対して、施設面での遅れが顕著になってきていた。これに対して、東大阪市教育委員会では老朽化した木造の講堂を鉄筋コンクリート造の教室に建てかえて施設を拡充することにし、工事を昭和47年度事業において行なうこととした。ところが、本校の敷地の北側には周知の鬼塚遺跡が存在しており、校舎建設工事によって遺跡が破壊される可能性があると考えられたため、当調査会は市教育委員会の依頼を受けて当該区域が遺跡範囲に含まれるかどうかを確認するための試掘調査を行なった。試掘は2×5mのトレチ2カ所を設定し、昭和47年11月20日より開始した。その結果、現地表より約1mの深さの黒褐色粘土層から弥生時代後期の土器が出土し、上層より少量の土師器、須恵器が出土したが、25日からの既設講堂撤去のために、調査は下層に縄文時代の遺構、遺物が存在するかどうかを確認し得ないまま一応終了した。その後、出土した遺物をもとに当調査会は市教育委員会と協議した結果、当該区域が鬼塚遺跡の範囲に含まれるかどうかについては依然不明であるが、地表下1mに検出した黒褐色粘土層が弥生後期の遺物包含層であること、およびこの時期の遺構も遺存が予想されることの2点をもって予定地全面の発掘調査を行なうという結論に達したのである。

III 調査概要

調査は昭和48年2月1日に開始し、3月31日をもって終了した。調査区域は講堂撤去跡の約300m²の範囲である。発掘を行なうにあたっては、調査区域に盛土、および基礎コンクリートの残片が残っているために、地表面から0.5mまでは機械掘削によってこれらを排除した。盛土を排除した面で調査区域を東から西へ5m方格に区画し、HO1～HO4と仮称して調査を進めた。

1. 層序

上から第Ⅰ層（褐色土）、第Ⅱ層（灰色砂）、第Ⅲ層（黒褐色粘土）、第Ⅳ層（灰黒褐色粘質土）となっている。各層は自然地形にもとづいて東から西へ向って下降し、調査区域の東端と西端とでは約1mの比高差をもつ。また、わずかではあるが南から北にかけて下降している。

第Ⅰ層はかなり擾乱を受けた層である。西に向うにしたがって厚さを増し、褐色土と淡褐色土の2層に区分できる。

第Ⅱ層は淡灰褐色砂層、褐色粗砂層、青灰色細砂層に細分できる。この層もHO1では淡灰褐色砂層の単層であるが、西に向うにつれて褐色粗砂のレンズ状堆積がみられ、第Ⅲ層との境には青灰色細砂が薄く堆積するようになる。

第Ⅲ層は全域にわたって20～30cmの厚さで堆積している。この層はHO2、HO4などでは疊を多く含む。この層の下半は淡黒褐色の砂質粘土となり、第Ⅳ層との境は漸移的である。

第Ⅳ層は全域にわたって60～70cmの厚さで堆積している。この層もHO4では疊を多量に含んでいた。

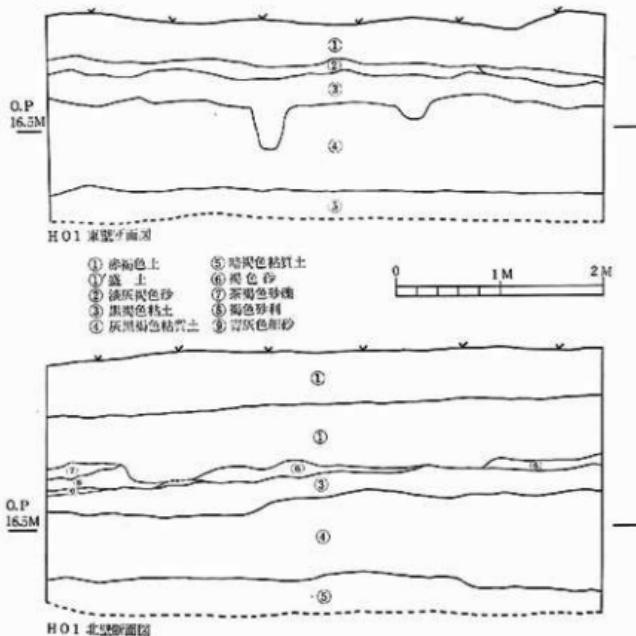
これより下層は、第Ⅴ層淡黒褐色砂質粘土層が50cm程続き、さらに、青灰色の細砂層へと続いている。これら各層の関係は豊浦川が形成した扇状地地形の堆積過程を示すと考えられるものである。

遺物は第Ⅰ層から第Ⅳ層に含まれていた。第Ⅰ層は擾乱を受けた部分もあり、土師器、須恵器、弥生式土器の破片が少量出土しただけである。第Ⅱ層は砂層の堆積とともに流れ込んだ弥生式土器、土師器、須恵器を少量含んでいた。第Ⅲ層は弥生時代後期の土器包含層で、HO3を中心にしてバスケットに約30杯の土器片が出土した。この層には、弥生後期の土器に混って弥生中期の細頸壺が一点出土したほか、縄文晚期の深鉢片が若干出土している。また、土師器も数点みられ、口縁断面がS字状をなした台付壺もこの中に含まれている。しかし、これらの遺物は層位的に分けることができず、扇状地特有の土砂堆積に伴って流れ込んだものと思われる。第Ⅳ層は縄文晚期の土器片を少量含むほか、弥生後期の土器片も認められた。しかし、第Ⅳ層からの出土遺物の量は第Ⅲ層にくらべると少ないとされる。

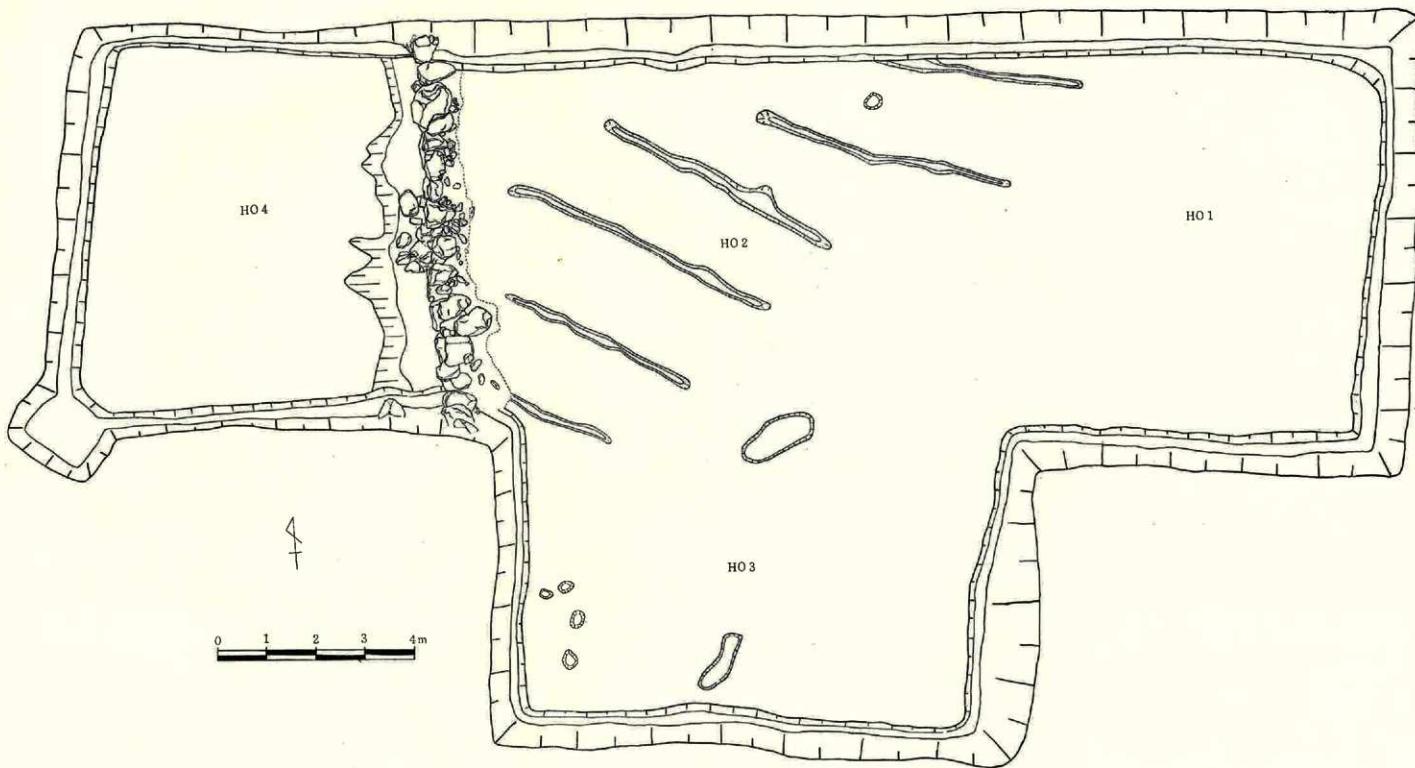
2. 遺構

第Ⅳ層上面でピット8個、土壙2個、溝状落ち込みが6条検出されたが、性格を知りうる明確な遺構は認ることができなかった。

ピットはHO1の東側断面に直径30cm、深さ40cmをはかる柱穴状をなしたものがあらわれたほか、HO3に直径20~30cm、深さ15~30cmのものが5個集まっていた。土壙は長さ1m、幅0.5m、深さ20cmをはかる底の浅いもので、土壙内に堆積した土からは獸骨片と歯が出土した。溝状落ち込みは長さ5m、幅0.3m、深さ10cmの小溝で、ほぼ等間隔に南東から北西に延びている。以上のピット、土壙、溝に堆積した土からは弥生時代後期の土器片が出土した。第Ⅲ層の包含層には縄文式土器や土灰器も含まれているので遺構の時期は決定できないが、可能性としては弥生時代後期に比定するのが最も妥当であろう。なお、HO4で第Ⅰ層から第Ⅲ層までを掘り込んで生駒石を南北に掘えた石列を検出したが、この石列の張り方からは近世以降の陶器、瓦等が出土しており、石列の用途は傾斜地を水田にするための石垣であろうと思われる。



第3図 HO1断面図



0 1 2 3 4m

IV 出土遺物

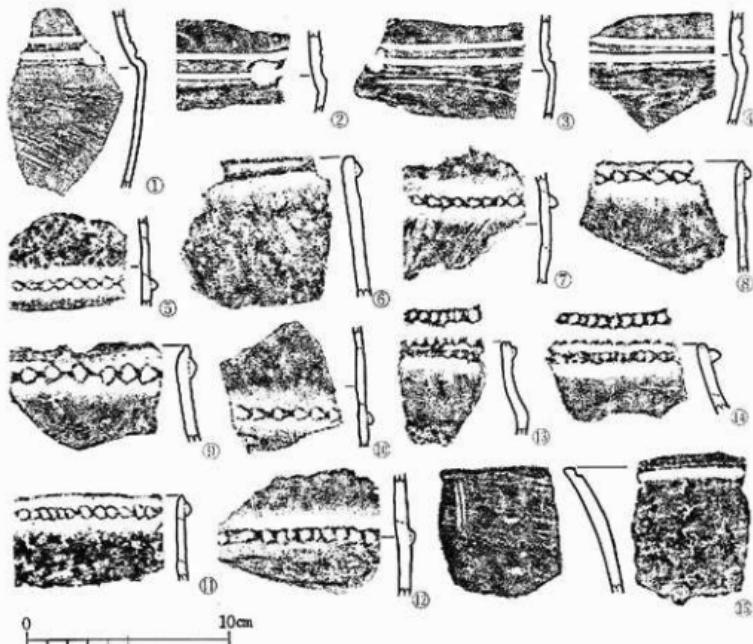
出土遺物は土偶が一点あるほかすべて土器である。

土器は弥生時代後期の土器が大半を占めるが、他に縄文時代晚期、弥生時代中期、古墳時代の土器も少量ながら出土している。

1. 縄文時代晚期の土器

深鉢 A ①～④ 口縁部と胴部をわける部分に段をもち、口縁部には卷貝による沈縫が2条めぐる。また、沈縫には途中、卷貝腹縁による圧痕が施されている。調整は口縁部外面をナデ、胴部外面を卷貝で行なう。内面は水平方向に削った後ナデ調整する。褐色を呈し、雲母を胎土に含む。胴部外面には煤が付着している。

深鉢 B ⑤～⑩ 口縁部と胴部の外面に凸帶を貼り付けたもので、凸帶にはヘラ状器具を押し



第4図 縄文式土器拓影

あてて菱形に刻目を施している。⑥は口縁外面に凸帯を貼り付けるが刻目は施されていない。この種の深鉢の内面には粘土紐の継ぎ目が2cm前後の間隔で顯著に認められる。調整は外面を斜方向あるいは水平方向に削り、内面は指おさえで仕上げている。

深鉢C⑩、⑪ 口縁外面に刻目凸帯を貼り付けるほか口端にもヘラによる刻目を施したものである。口縁部は脇部から内傾して立ち上がる器形で、器面は内外面とも丁寧にナデ調整されている。

浅鉢⑬ 大きく外反する口縁部をもち、口端は丸くなっている。口端内面には円錐状器具による沈線がめぐり、沈線には有機物が付着している。調整は内、外面とともに水平方向の粗い磨きを行なっている。外面に煤が付着している。

2. 土偶 第5図

高さ7cm、幅7.3cmをはかる。人体の頭、肩、胸を表現するが腹部にあたる表現はない。頭部は欠失している。全体に肩平な形をなし、肩部から脇部にかけては表裏ともヘラ先による刺突が施されている。あるいは衣服を表現したものかと思われる。また、脇部下面には円形の窪みがあり、この窪みに対応して頭部にもヘラ先を回転して窪みをつけていることから、これらの窪みは人体の消化器官を表現したものとも考えられる。

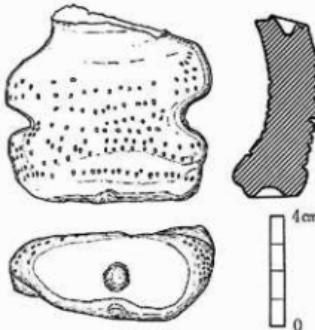
3. 弥生時代中期の土器

細頸壺 第12図 壺が低く張り出した脇部をもち、口頸部から脇部にかけては櫛描き簾状文を密に施文している。また、肩部には簾状文の間に3個一組の円形浮文を2段にわたって貼り付けており、脇部にも円形浮文がみられる。内面は、口頸部にヨコ方向の刷毛目調整が行なわれ、脇部は指おさえで仕上げている。そのため、脇部内面には輪積みの痕跡が認められ、約3cmの幅で粘土紐を積み上げて成形したことがわかる。

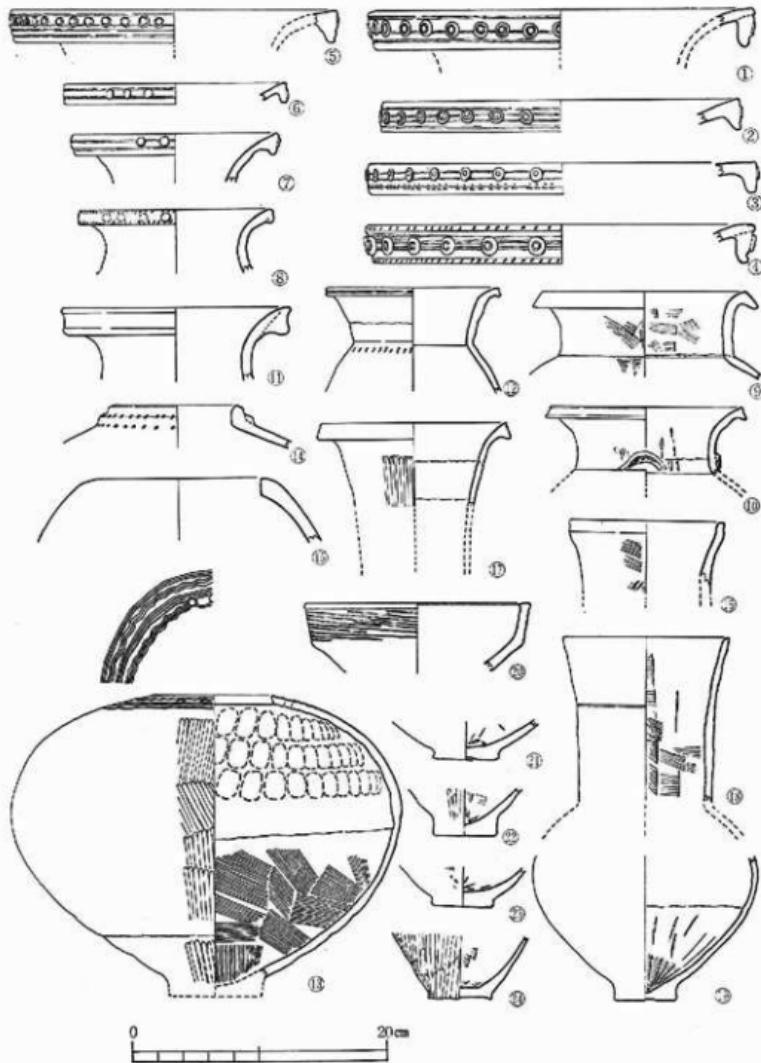
弥生時代中期の土器には、このほか灌斗状の口頸部の口端に簾状文を施文した壺、および折り返した口縁をもつ大型の壺、高杯の脚部が出土している。これら弥生時代中期の土器は出土量も僅少で、なかには摩滅の著しいものがある。

4. 弥生時代後期の土器

壺、甕、鉢、高杯、器台の器種が認められ、量的に最も多いのはやはり甕で、壺、高杯、



第5図 土偶実測図



第6図 盆

鉢、器台と続く。器台は2個体出土しているだけである。これら弥生時代後期の土器の胎土は、いわゆる河内山麓部の土器と総称される褐色ないしは淡褐色、淡赤褐色を呈するもので、角閃石、雲母をなかに含むため搬入品との識別は比較的容易である。

広口壺A₁ ①～⑤ 口端に粘土を補充して拡張し、これに竹管を押捺した円形浮文を貼り付け、退化した凹線が3～4条めぐる。施文帯の上縁あるいは下縁にはヘラ先による刺突文がめぐる場合が多い。③、④、⑤には丹彩の痕跡が残っている。口端だけの出土が多いので、器台の口縁部もなかには含まれていると思われる。

広口壺A₂ ⑥～⑧ 広口壺A₁にくらべて口径が小さく、口端拡張部に2個ないし3個一組の円形浮文を貼り付けている。⑦はヨコナデ調整を行なった後ヘラ描き沈線をめぐらしたものである。

広口壺B ⑨～⑪ 口端を拡張するが施文は行なわないものである。⑩は頸部から肩部にかけて斜方向、ないしタテ方向に刷毛目調整し、その上をわずかにナデて仕上げている。頸部内面は刷毛原体を動かして器面を拭き削るようにして調整した痕跡が顕著にみられる。⑪は頸部に粘土紐を半円形に貼り付けた記号的浮文をもつ。

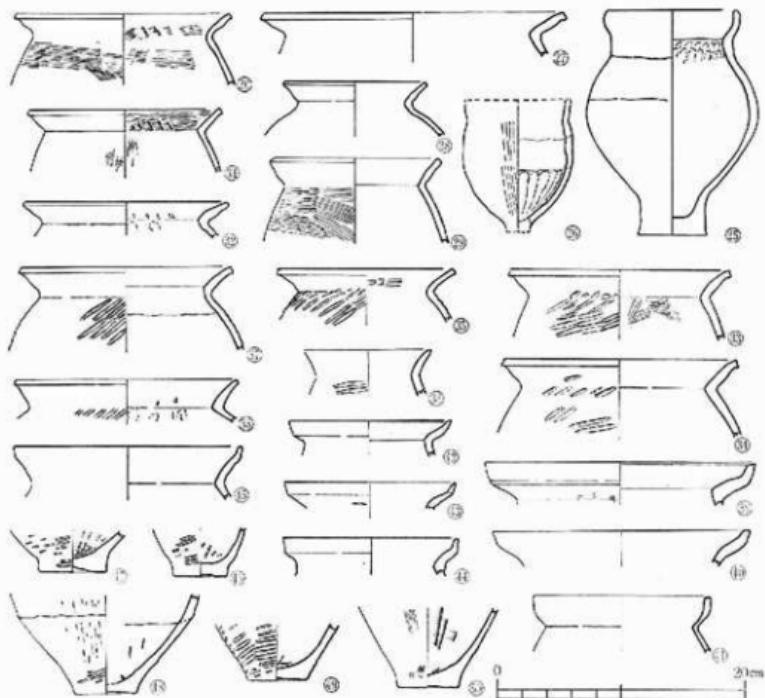
広口壺C ⑫ あまり肩の張らない肩部に外反する口頸部をもつ。口端はわずかに外へ折り返し、ヘラによる沈線をめぐらしている。また、肩部上縁にはヘラ先による刺突が左回りに施されている。全体に砂粒を多く含む胎土のため器面は風化しているが、口頸部中位に接合痕が認められ、これを境に焼きあがりの色調も変化している。

無頸壺A ⑬ 大きく肩の張った器形で、器高よりも最大腹径の方が大きい。この土器の口径は9.4cmと無頸壺にしては小さく、広口壺の口頸部をとり除いた器形に似ている。口縁近くには2個一対の紐穴が二組あり、この紐穴をあいだにはさんで幅5cmの施文帯がある。文様は、回転台を用いて織原体を動かして施文した波状文と直線文が交互に描かれている。調整は、肩部外面をヘラ磨きし、内面は器体中位の接合痕を境として上を指おさえで、下を斜方向の刷毛目で行なっている。この土器の口縁部には擬口縁状の剥離面が認められ、焼成前に広口壺から無頸壺に作り換えたとも考えられる。

無頸壺B ⑭ 段状口縁をもつ無頸壺で口縁部だけの破片である。段状口縁は、口縁の下に凸唇状の粘土紐を貼り付けて形成している。文様としてヘラ先による刺突が右回りに2段施されている。淡赤褐色を呈し、砂粒を多く含んだ胎土である。

無頸壺には、上記の2点のほかに第Ⅰ層から出土したもの、⑮がある。これは直口の口縁部に丹塗の痕跡がわずかに残るもので、完全な流れ込みの資料であるが一応ここでとりあげておく。

長頸壺A ⑯、⑰ イチジク形の肩部に円筒形の長い口頸部をもった長頸壺となる。口頸部⑯は外面にヘラ磨きのあとが一部に認められ、頸部にヘラによる沈線が1条めぐっている。内面は左回りに刷毛原体を動かして器面を調整している。刷毛目は、目の粗いもののに細かいものが重なっており、細かい刷毛目は粗い刷毛目の上をナデするような使い方をしている。肩部



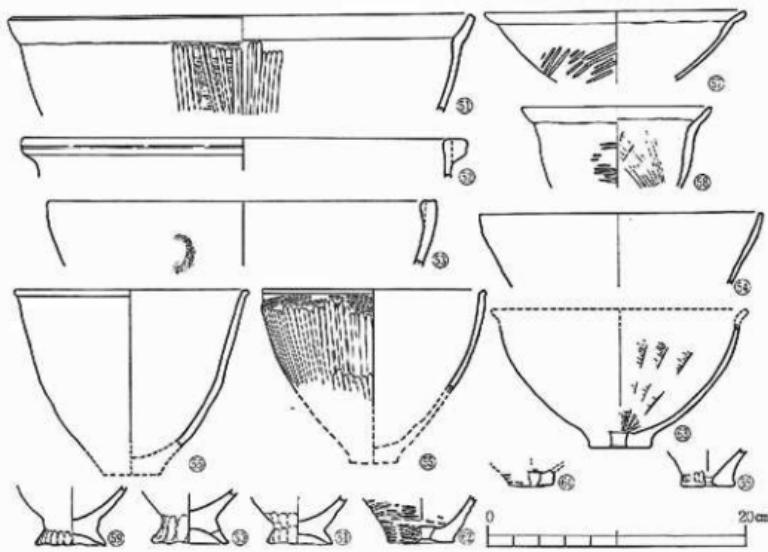
第7図 圖

⑪は内面に接合痕を残しており、分割成形されたことがつかがえる。外面はヘラ磨きされ、内面は刷毛原体を断続的に回転させて器面を研ぎ削ったあとが顕著である。この放射状の調整痕は接合部の指ナデによって一部消されている。

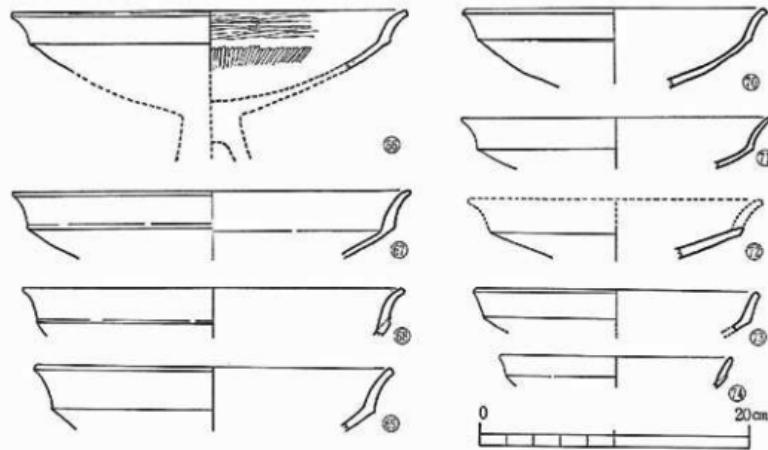
長頸壺B ⑫ ゆるやかに外反する口縁部をもち、口端は外に折り曲げている。頸部外面は口縁直下をヨコナデで、これより下はタテ方向にヘラ磨きを行なっている。磨きは頸部中位の接合痕を消すようにして開始されている。

短頸壺⑬ 頸部がゆるく外反したのち、口縁が内湾ぎみに立ち上がる器形。口端はヨコナデによって面をつくる。口縁部外面は細かい刷毛目の上を一部ナデ調整し、内面は右から左にへらで調整する。口縁部は胴部との接合部に沿って割れている。

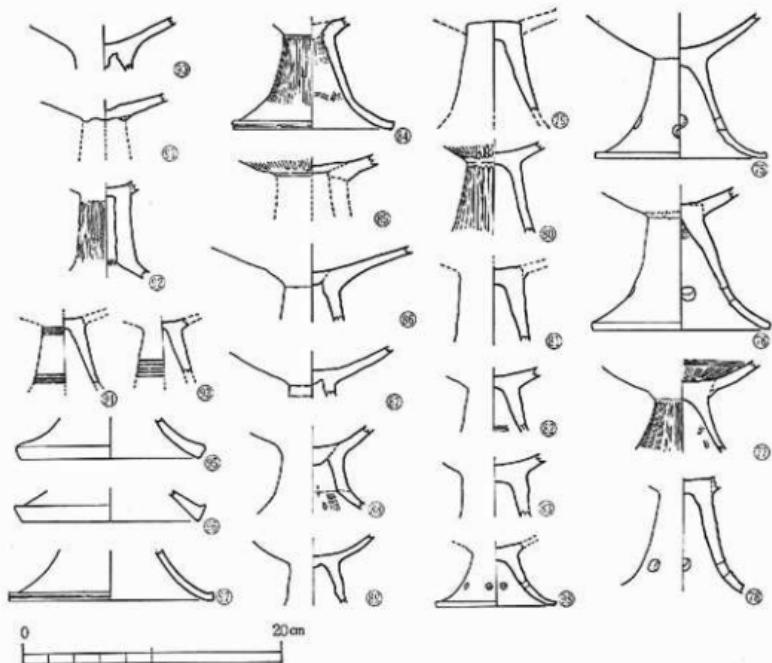
壺口縁部 ⑭ 口径の大きさ、および口縁の立ち上がりから壺としてとり扱ったが、高杯の杯部になる可能性も考えられる。ここでは一応壺とみて観察することにした。2壺に立ち上がる口縁の屈曲部は下方に突出せず、ゆるやかに移行している。口縁部外面には、ヘラ括き沈線



第8図 鉢



第9図 高杯杯部



第10図 高杯脚部

を重ねた文様が施されている。内面は全体にヨコ方向のヘラ磨きが行なわれ、口端は丁寧なヨコナデによって面を形成する。色調は淡赤褐色を呈し、胎土には河内山麓部の土器に特徴的な角閃石を含む。

壺A ⑩、⑪ 内弯する口縁部と球形の肩部をもち、底部はやや厚めの平底である。肩部下半はタテ方向にヘラ削りされ、そのため底部がいちだんと大きくみえる。接合痕が口縁部と肩部の境および肩部にみられ、口縁接合部の内面は指おさえで調整している。

⑩は高さ 11cm、最大腹径 9cm をかる小形のものである。外面のヘラ磨きは肩部上半と下半に 2 回にわけて行なわれている。内面には 2 条の明瞭な接合痕が残り、器体中位の接合痕以下はタテ方向に指おさえで器形を整えている。外面にヘラ磨きが行なわれているが、器形と様が付着することから小形の壺として分類した。

壺B ⑫～⑯ くの字形に外反する口縁をもち、肩部外面を刷毛目調整したものである。内面は指ナデによって平滑に仕上げたものと、ヨコ方向に刷毛目調整したものとがある。また、土器を成形する際に口縁部をしづり出した製作法をとるものはなく、口縁部と肩部の境に接合

痕を残すものが多い。

甕C₁ ⑩、⑪ 受口状口縁をもつ類でも口径が20cm以上の大型のものである。この種の甕は口縁部のヨコナデが丁寧に行なわれ、口端が面をなすのが特徴である。口縁部と胴部は接合し、接合痕は刷毛目調整で消している。

甕C₂ ⑫～⑯ 口縁部のヨコナデが甕C₁程丁寧でなく、口端は面をつくらずに鋸い稜を形成している。口径20cm以下の比較的小型の甕に多くみられる形態である。受口状の口縁部は、口端の立ち上がりに粘土紐を組ぎたして成形したものと、いっしきに口端まで作り上げたものがある。粘土紐を組いだものは屈曲部外面に鋸い稜をつくり、粘土をつまみ上げて成形したものには痕がみられない。甕C₂の胴部には叩き目を有するものが多い。

甕D ⑰～⑲ 外反する口縁部をもち、胴部外面に叩き目を有する。この種の甕のなかには口縁部外面にしばり痕と叩き目を残したものがあり、口縁部をしばり出して成形したと判断できるものがある。胴部は、接合痕を境として叩き目の方向が変化する、いわゆる分割成形技法によって製作されており、胴部下半の叩き目を削毛目で消す例も認められる。⑰、⑲は石英粒を含んだ乳赤色の胎土で、河内山麓部の土器ではない。

大型鉢 ⑳～㉑ ㉑は口縁部外面に、㉒は口縁部内面に粘土を補充して端部を肥厚させている。㉓は外折する口縁部をもち、体部の内面、外面はともにタテ方向のヘラ磨きを行なう。外面の磨きは器面を刷毛原体でヨコ方向に搔き削った後に行なっている。

鉢A ㉔～㉖ ㉔は直口の口縁にやや深い体部をもつ鉢である。㉕は口縁部外面にだけ刷毛目を残し、体部はヘラ磨きをしている。㉖は体部外面を刷毛目調整するが、粗雑な仕上げである。内面はいずれもナデによって平滑に仕上げている。

鉢B 辺、㉗ 外折する口縁に、叩き目を有する浅い体部をもつ鉢である。叩き目は左回りに行なわれている。ともに体部内面の下半をヘラ削りによって薄く仕上げている。㉘の外面に煤が付着する。

高台状の底部 ㉙～㉚ 底部の粘土を指で引き出して高台状に成形したものである。仕上げはすべて手づくねのままで、外面だけに粗いナデを施している。

有孔鉢形土器 ㉛～㉜ 鉢の底部に円孔を穿ったもので、穿孔は焼成前に内面から行なったものが多く、㉛だけが焼成後に両面から行なっている。

高杯杯部 ㉖～㉗ 杯部はすべて口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部が外反する器形である。杯体部と口縁部は、いっしきに粘土を積み上げて成形せず、まず体部を成形した後粘土が乾きの状態で口縁部を接合している。口縁部の成形はすべて一本の粘土紐からである。

杯部a類 ㉘～㉙ 体部と口縁部の境の稜が鋸く、口縁部は外反する。口端はヨコナデによって丸くおわるものと角ばるものがある。調整はふつう口縁部をヨコナデし、体部をタテ方向にヘラ磨きする。㉘の内面は体部をタテに磨いたのち口縁部を接合し、接合痕をヨコナデした後口縁部をヨコ方向に磨いている。

杯部b類 ㉚、㉛ 小形の杯部で口縁部と体部の境の稜がやや鋸く。また、口縁部の立ち上

がりが短く、それ程外反しない。口縁部は内面、外面ともにヨコナデし、体部外面にはヘラ磨きが認められる。

高杯脚部A ⑩～⑪ 中空の脚柱部とゆるやかに拡がる裾部をもち、脚端はヨコナデによって端部上縁に稜をもつか、あるいは丸くおさめる。ほとんどは外面をタテにヘラ磨きして、裾部ではその上をヨコナデする。脚柱部内面はしづり痕をヘラで調整している。これらは器形からみれば同一型式に含まれるが、製作技法からみるとさらにa、b、cの3種類に分類できる。

a類 ⑩～⑪ 脚部だけを先に成形し、その後脚部上縁から粘土を積み上げて杯部を成形したものである。この種の製作方法は脚部の粘土をある程度乾燥させて調整の段階まで済ませた後杯部を作り上げている。⑪は脚部上縁に杯部が削離した面を残す。脚部と杯部の接合部をみると、杯部を成形する窓の、脚部の乾燥の込み具合が観察できる。

b類 ⑫～⑬ 連續して脚部から杯部へと粘土を積み上げて成形し、脚柱中空部には杯部を成形した後、円板状粘土を充填する、いわゆる円板充填法である。⑫は円板状粘土が剥離したもので、脚部から杯部への移行部は輪積みによって強固に作られているのがわかる。⑬は杯部と脚部が分離しているが、円板充填がみられる。⑭～⑮は脚柱部内面をヘラで削っている。

c類 ⑯、⑰ 脚部と杯部を別々に成形した後、組み合わせて接合したものである。杯部底部の中央が突起し、これを脚柱中空部に挿入して固定している。⑯は杯部の乾燥がかなり進んだ段階で組み合わせているが、⑰は乾燥がそれほど進んでいない段階で接合したため、脚柱中空部に杯部粘土がはみ出している。

高杯脚部B ⑯ 直立する脚柱部に届曲して裾部がつく。外面はヘラ磨き、内面はヘラを回転して器壁を削っている。

高杯脚部C ⑰、⑯ 網い脚柱部に櫛描き横線がめぐる器形。砂粒を多く含んだ胎土を使用している。

高杯脚部D ⑯ 小形の高杯脚部である。低く畠広がりの器形で、外面はヘラ磨きされ、内面はヘラ削りする。接合痕が脚部中位に認められる。

器台 上下が外反する円筒形をなし、口縁部は欠失する。外面はタテ方向の刷毛目で調整され、内面は裾部のヨコナデ以外指おさえで仕上げている。口縁部は広口壺Aと同様の施文帯をもった器形かと思われる。

5. 土師器、須恵器

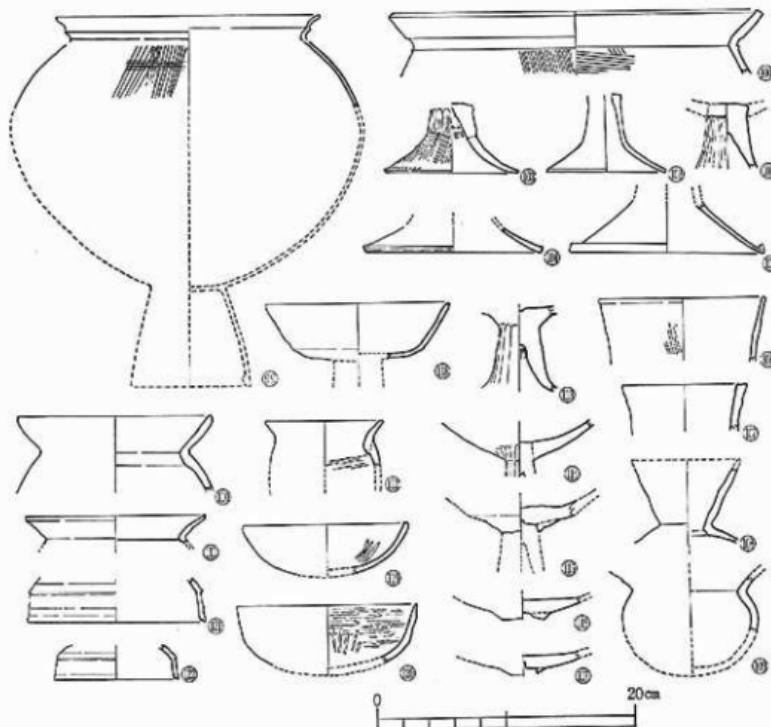
第Ⅱ層出土の土師器

台付壺 いわゆるS字状口縁をもつ壺で、破片は一個体分である。口縁部は内外面ともに丁寧にヨコナデされて2段に短く外反し、口端は丸くおさめる。脚部外面に斜方向の櫛目が明瞭で、肩部ではその上にヨコ方向の櫛目を重ねている。脚部内面は削った痕跡が認められないが、薄く(約0.25cm)、平滑に仕上げている。脚台の破片は出土していないが、器形、調整手法からみて台付壺と考えてよいであろう。脚部下半には煤が付着する。灰白色を呈し、細かい

砂粒を多量に含んだ胎土は、明らかに敷入品であることを示している。

甕 ⑩ くの字形に外反する口縁部をもち、口端内面が肥厚する。脚部は内面、外面とも刷毛目調整され、刷毛目は内面に粗く、外面に細かい。赤褐色の堅紙な焼き上がりの土器である。

高杯脚部 ⑪～⑯ は、器壁の薄い小形の高杯である。中空の脚柱部から角度をかえて裾部がつく。脚端はヘラをヨコにあてて形を整えている。脚柱の中空部分が脚部上縁にまで達しているのは、杯部製作の際に脚部の形くずれを防ぐための心棒を差し込んだあとか。乳褐色を呈し、精良な胎土を使用。⑯は、外面を細かい刷毛目で調整し、裾部にはヘラ先による刺突が全周の1/4程にめぐる。脚端は⑪と同様ヘラをヨコにあてて整えている。杯部は脚部上縁より粘土を積み上げて成形したもので、脚部の上面は杯部の内面として調整されている。黄灰色の精良な胎土を使用。



第11図 土師器、須恵器

上層より出土の土器、須恵器

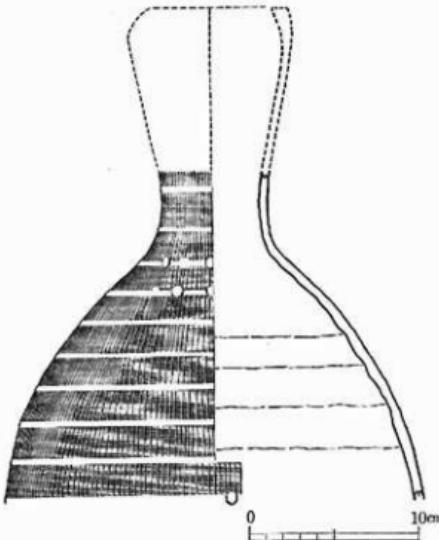
壺 ⑩～⑫ いずれも外開きの直口の口頸を有するもので、口端には面をなすものと丸くなつておわるものがある。⑪は外反する口頸部に丸底の胴部をもつ小型丸底壺の器形になると思われる。

甕 ⑬～⑯ ⑬は内窵ぎみの口縁部で、口端は丸くなつておわる。灰白色を呈し、砂粒を多く含んだ胎土を使用。⑭は口縁端部が上方に若干肥厚し、胴部内面へラ削りを行なった、いわゆる庄内式の甕。⑮は外反する短い口縁部をもち、胴部内面をヘラ削りした小形の甕である。

高杯 ⑰～⑲ ⑳はヘラ磨きによって脚柱部外面に面をつくる。⑳～㉑はいずれも杯部と脚部を別々に成形した後、挿入法によって接合したものである。脚部の形くずれを防ぐための心棒を差し込んだ痕跡が杯部の底部に残っている。㉑は杯口縁部が内窵ぎみに立ち上がりをみせる。色調は鮮やかな赤褐色を呈す。

碗 ㉒、㉓ 赤褐色の精良な胎土を使用した碗である。内面にナデの上に放射状の暗文がみられる。

須恵器杯蓋 ㉔、㉕ 天井部と口縁部をわける部分に稜をもつ。㉔はこの稜が鋭いが、㉕は鈍い。口縁部はいずれもわずかに外開きで、稜線部の径よりも口径の方が大きい。



第12図 弥生中期細頸壺

V 出土遺物のまとめ

編文式土器は破片総数24個の少量でいずれも晩期のものである。晩期縞文式土器のうち深鉢は文様を有する例が前半期にみられるが、後半期になると凸帯を有する土器に急激されるような無文、粗製に変化する。本遺跡出土例のなかで、深鉢Aは口縁部外面に沈線文と圧痕文をもつことから、晩期でも前半期に比定できる。深鉢B、Cは口縁部に刻目凸帯を貼り付けた晩期後半の土器である。出土した層位において、深鉢Aと深鉢Cは第Ⅳ層から出土し、深鉢Bは第Ⅲ層から出土している。しかし、深鉢Cと深鉢Bの型式差を時間的な差異によると考えることは、本遺跡の包含層が扇状地特有の流れ込んだ堆積によることからも妥当ではない。以上の縞文式土器のほかに、第Ⅲ層から土偶が1点出土している。土偶は東大阪市六万寺の馬場川遺跡より、滋賀里式併行の土器に混って20点以上出土しており、最近になってさらに動物偶と合せて10点が新たに出土した。⁽²⁾ 本遺跡では、昭和40年に採集された土偶と同じく、晩期後半の深鉢⁽³⁾に混って出土したものである。

第Ⅲ層の包含層から出土した弥生式土器は、大半が西之辻遺跡出土の後期の土器と相似した特徴をもっている。壺では口端拡張部にヘラ焼き沈線を施し、その上を粗くヨコナデした凹線文の退化文様と円形浮文とを施文した広口壺A₁、同様の器形で無文の広口壺B、直口の口縁をもつ長頸壺Aなどは西之辻遺跡I地点に出土例がある。広口壺の口頭部をとり除いたような器形の無頸壺Aも同時期のものであろう。一方、円筒形の口頭部の口端を折り返した長頸壺Bは、西之辻遺跡E地点から出土している。壺では胴部外面を別毛目調整した西之辻I式の壺と、叩き目を有する西之辻E式の壺とがほぼ同壺で出土している。叩き目はすべて平行叩き目である。受口状口縁の壺Cは口径が大きく、口端上縁がヨコナデによって面をなす壺C₁を西之辻I式に、口径が小さく口縁の調整もやや粗雑で、口端上縁が鈍い稜をなす壺C₂を西之辻E式にそれぞれ比定できる。壺C₂の胸部破片には叩き目が施されている。鉢は出土量が多くない。このなかには大形鉢を含んでおり、叩き目をもつ浅鉢もある。生駒西麓におけるこれまでの調査では、大形鉢が後期になっても残ることを考えると、鉢も西之辻I式からE式にかけての時期に比定できる。高杯は、杯口縁が直立ぎみのI式の器形は認められず、外反する口縁部をもったE式の器形が大部分を占めている。また、製作技法をみると、高杯の杯部と胸部の接合方法に3種類あって、これは大きく弥生中期に盛行する連続成形法と後期になってあらわされる組み合わせ法の2つに分けることができる。量的には、組み合わせ法が多数を占めることから、製作技法が連続成形法から組み合わせ法に変化する移行段階を示すものと考えられる。⁽⁵⁾ このことから、高杯もI式の時期に含まれることが考えられ、杯部の器形は後期初頭からすでに西之辻E式にみられる器形が盛行していたと思われる。

弥生後期の土器を西之辻I式、西之辻E式（D式）、上六万寺式、北島池式と4期に型式編年する考えでは、縞年の指標として壺の製作技法がI式の全面別毛目調整からE式になって平

行叩き技法と分割成形法が登場し、次の上六万寺式で特徴的な受口状口縁の出現とラセン叩き技法が新たに加わり、北島池式においてこの技法が確立されるという移行過程が示された。これら(6)の製作技法上の変化は、ある程度連続性をもつものである。例えば、上六万寺期から現われる特徴的な受口状口縁は、すでに西之辻I式（弥生式土器集成PL12、本遺跡図5、39、40）からの変化をたどることができ、I式の口端部が面をなすものがE式では端部が尖るようになり（図5、42～45）、上六万寺式～北島池式では口縁部外面のヨコナデが強調されて二段に外反する口縁形態となる。そして、この種の口縁は北島池式以後、退化しながらも上田町II式の丸底で内面ヘラ削りを行なう型にまで存続する。

以上のように、弥生後期の土器は大形の広口壺と長頸壺A、B2種が認められ、壺では胴部外面刷毛目調整の壺Aと叩き目をもつ壺B、受口状口縁の壺Cが認められること、および高杯の製作技法がそれまでの連続成形法から後期以後に多い組み合わせ法に変化する過渡期にあたるなどの点から、後期でも前半期に比定される西之辻I式、E式の土器型式群であることがうかがえる。

つぎに、土師器のなかでは第Ⅲ層出土のS字状口縁をもった台付壺が注目される。この種の台付壺は東海地方に分布の中心をもち、近畿地方ではこれまでに大和において平城宮下層、(7)桜井市櫻向、天理市布留などからの出土例が報告されている。ところが、生駒山地以西では、わずかに堺市石津から前台の退化した一例が知られているだけである。⁽⁸⁾今回の出土例はS字状を呈する口縁部の整形を入念に行なったもので、大參義一氏分類のb類にあたる。⁽⁹⁾b類S字状口縁台付壺は、分布の中心とされている尾張、西三河地方では弥生後期欠山式の新しい段階から、土師器に移行する段階の元屋敷式において確立する型式と考えられている。この類がS字状口縁台付壺の最盛期にあたり、分布範囲も近畿から関東にかけて広く分布している。櫻向、布留両遺跡では、伴出土器がいわゆる庄内式～布留式併行期のものであることが確認されているが、本遺跡出土例は2次堆積の包含層からの出土であるために同伴関係は明確でない。そこで、他地域での伴出例から本遺跡出土のS字状口縁台付壺の年代について考えてみたい。

飛鳥地域での古式土師器との同伴関係をもとにしたS字状口縁台付壺の編年案によれば、口縁部の調整が入念で口端が丸くおわるb類は、古式の布留式と伴出することが報告されている。本遺跡第Ⅲ層出土の土師器には、年代を決定できる資料は見あたらないが、昭和43年の調査によって弥生後期の土器と同一包含層から一括出土した古式土師器の資料があり、これらの土器の年代は上田町II式から布留式の古い段階に比定できる。この事実を重視すれば、S字状口縁台付壺は飛鳥地方と同様に古式の布留式の時期に投入されたものと考えられるのである。⁽¹⁰⁾いずれにしても、盛行期のS字状口縁台付壺が生駒山地以西に投入されているという事実は、東海地方との文化交流ならびに畿内諸地域相互の関係を研究するうえで重要であり、同伴関係の究明は今後の調査に課題として残された問題点である。

VI 結　　び

今回の発掘地点は、從来土器が出土した地点および発掘調査された地点からはやや南に離れているために、包含層の遺物にも若干の違いが認められた。鬼塚遺跡は、一般に縄文晚期船橋式の深鉢と弥生前期古段階の壺が伴出した遺跡として著名であるが、今回の調査で出土した土器の主体は弥生後期の土器であり、縄文晚期の土器と弥生前期の土器の伴出関係はみられなかった。昭和43年に東大阪市教育委員会が行なった調査の際も、出土遺物の量では弥生後期の土器が多くを占めており、今回の調査で検出された性格不明の小溝、ピット、土壙などを集落の一部に含まれるものと考えれば、集落の範囲は弥生後期に拡大したと思われる。さらに、古墳時代にも引き続いて集落が營まれたことがうかがえる。現在までのところ、性格の明らかな遺構は検出されていないが、縄文晚期～弥生前期の遺跡範囲が從米土器が出土した地点を中心とするのに対して、弥生後期の遺跡範囲はさらに南東方向に拡がっているものと思われる。今回の調査は遺跡の南東方向への拡がりを確認したにとどまるものであり、今後は東方から北方にかけての各時期の遺跡範囲を確認し、遺跡の性格を総合的に判断する必要があると考えている。

- 注① 「河内古代遺跡の研究」 大阪府立花園高等学校 昭和45年刊。
② 「馬場川遺跡Ⅰ」 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報 4 昭和45年刊。
③ 「馬場川遺跡Ⅱ」 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報14 昭和50年刊。
④ 小林行雄、杉原莊介編、「弥生式土器集成 資料編」 昭和33年刊。
⑤ 佐原真、「土器製作技術の変遷」『索究出』所収 昭和39年刊。
⑥ 都出比呂志、「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』No.80所収 昭和49年刊。
⑦ 安達厚二、「古墳時代溝出土の遺物」『奈良県立文化財研究所年報1969』所収 昭和44年刊。
⑧ 石野博信、「奈良県掘削遺跡の調査——三輪山麓における古墳時代前期集落の問題」『古代学研究』65所収 昭和47年刊。
⑨ 畠田雅昭、「大和における古式土師器の実態——天理市布留遺跡出土資料」『古代文化』No.26-2 所収 昭和49年刊。
⑩ 大參義一、「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集(史学)』第47号所収 昭和43年刊。
⑪ 安達厚三、木下正史、「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』No.60-2 所収 昭和49年刊。
⑫ ここで言う布留式は“広義の布留式”的意味で、小若江式に特徴的な小型三種の土器と口縁内面が肥厚する壺の間に相当する新旧の要素をもつものまでを含めて、広く布留式と規定した。よって、この場合の古式の布留式とは、平城宮下層の溝から出土した土器群と同様の編年的位置を占め、河内地方の庄内式として特徴的な上田町Ⅱ式の壺に小型三種の土器が盛行する時期の土器を伴った鬼塚遺跡の土器群を指している。

岩 田 遺 跡

目 次

Iはじめ	(20)
II調査概要	(21)
III出土遺物	(23)
IVまとめ	(26)

例 言

1. 本調査報告は、玉美小学校分校建設予定地の遺跡確認の試掘調査の報告である。
2. 本調査は、東大阪市教育委員会の委託により昭和48年7月25日から8月5日にかけて福永信雄を担当として当調査会が実施した。
3. 調査中は、岩田公民分館館長森田万治郎氏をはじめ、同館の職員の方々から、湯茶および休憩所の提供を受けた。記して謝意を表する。
4. 調査中は、内田和男、裏野昌一、山本克之、井田和太、飯塚順之の学生諸君から協力を得た。記して謝意を表する。

I はじめに

調査地点は、古墳時代初頭から歴史時代の集落址で知られた西岩田遺跡の東方約500mの地点で、現在の地名は東大阪市西岩田町5丁目12番地である。この付近には式内社石田神社が南約500mの地点に、瓜生堂遺跡が西南約700mの所に存在している。

調査地点付近は近年まで一面の水田であったが、ここ10年前より大阪市の周辺都市としてスプロール化現象が激しく、調査地点付近を除いた周辺はすべて宅地化されている。このスプロール化による人口急増に伴い、従来の玉美小学校は児童数の急増に追いつかず、分校建設が東大阪市教育委員会により決定され、当調査会に予定地内の遺跡の有無確認のための試掘調査の依頼があった。

当調査会は、予定地が先述の西岩田遺跡の隣接地であることから何らかの遺構が存在する可能性が高いとして、この試掘調査を受諾することを決定し、7月25日から8月5日にかけて試掘調査を行なった。

この報告は以上の試掘調査の結果をまとめたものである。



第13図 岩田遺跡周辺地形図 1:10000

II 調査概要

校舎建設予定地の全域にわたってボーリング調査を行なったが、予定地内の南端、山力製作所裏の畠地を除いて、他の箇所は耕土を除くとすぐに青灰色粘土層が厚さ1m以上にわたってあらわれ、この中には遺物がまったく含まれていないことが判明した。この結果、山力製作所裏の畠地を中心トレンチを設定することに決定した。

まず、山力製作所裏を東西に流れる幅約1mの農業用水路を境として、北に2×3mのトレンチ（Nトレンチ）を1ヶ所、南に2×4mのトレンチ2ヶ所（東よりSトレンチ、S.1トレンチと称した）を設定し調査を行なった。

Nトレンチ

Nトレンチの様相は、耕土、および床土を除きそれより下層は灰黒色粘土層と、灰黒色粘質砂層が互層になって深さ2mまで続いていた。遺構は全く存在せず、地表下約1.5m付近の青灰色粘質砂層内で摩滅の激しい円筒埴輪および、須恵器少量が出土したが、他の層からは全く遺物は出土しなかった。

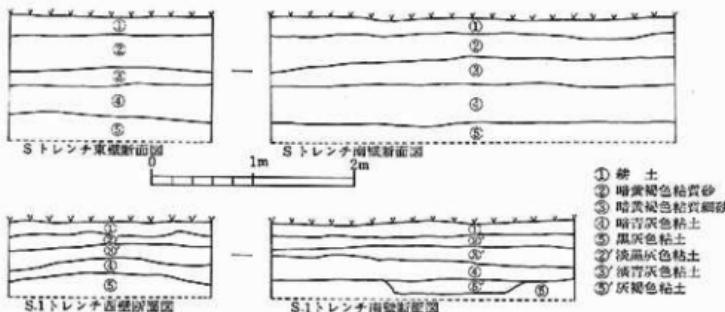
なお、このトレンチは激しい湧水のために断面が崩壊し、セクション図の作成は不可能であった。

Sトレンチ

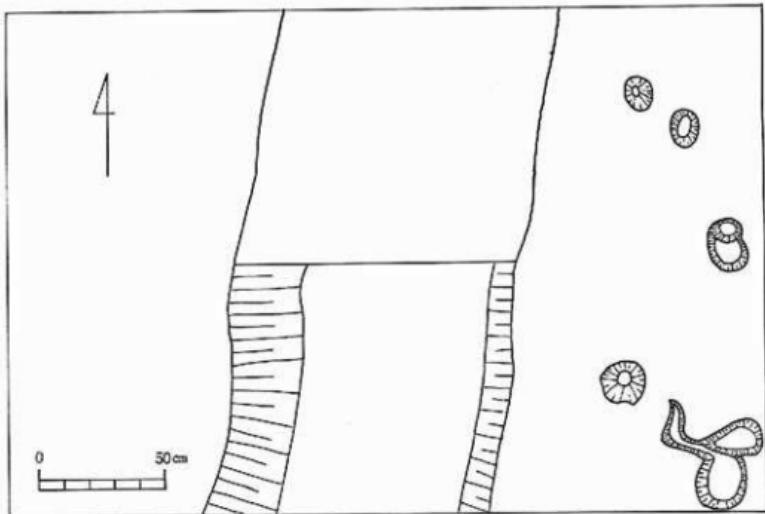
層位は、上層より耕土、暗黄褐色粘質砂、暗黄褐色粘質細砂、暗青灰色粘土、黒灰色粘土の各土層より形成されている。

遺物は暗黄褐色粘質砂層より黒灰色粘土層まで含まれていた。以下各層より出土した遺物を順に述べる。

第2層からは瓦器、須恵器、土師器が出土した。第3層の遺物も第2層とほぼ同じようなも



第14図 Sトレンチ、S.1トレンチ断面図



第15図 S.1 トレンチ平面図

のであるが、少量の摩滅のはげしい円筒埴輪を後出した。第4層は、第3層ほど摩滅の激しくない円筒埴輪が多数出土したが、二次堆積の状況を示していた。第5層からは時期の下ると見られる土師器が上面に少量出土した。

ここまで掘り進めた段階で、湧水が激しく断面崩壊の恐れがでてきたため調査を断念せざるを得なかった。

このトレンチからは遺構をまったく確認することができなかった。

S.1 トレンチ

Sトレンチの西に設けたS.1トレンチでは、耕土以下第4層までの遺物の出土状況はSトレンチとよく似たものであったが、第5層において、この層をベースにして作られた幅1.4m、深さ13cmの直状の溝がトレンチのほぼ中央に南北に走ることを確認した。また、直径10~20cmのピット群も同時に確認した。ピット内には時期の下る土師器の小片が少量落ち込んでいた。トレンチが狭く、また、今後の調査に備えてトレンチを拡張しないという方針により、この遺構の追査を行なわなかったため性格は不明である。

III 出土遺物

調査地点より出土した遺物はほとんど攢乱した二次堆積によるもので、古墳時代後期の円筒埴輪、平安時代後期の土器、陶器、鎌倉時代末期の瓦器、陶器等のものが主である。遺物の量はそれほど多くないが、ここでは実測可能な遺物について、種類別に報告したい。

円筒埴輪

出土した破片が小片のみであるため、全形を知ることができない。しかし、他の出土例からみて口径 25cm 前後で、凸帯を三段にめぐらす円筒埴輪であると思われる。凸帯は全部すでに退化しており、断面は形のくずれた低い台形を示している。透し穴は確認できるものはすべて円形であった。なお、朱塗の円筒埴輪（図⑥）が一点出土している。

図①～④は、上段の口縁部付近の破片で、図①、③は外表面を 5 条/cm のハケメで調整し、図④は 9 条/cm の細かいハケメで調整している。図⑤～⑩は、二段目および三段目の破片で、外表面は 5 条/cm 前後のハケメで調整し、内面はユビ調整である。図⑪～⑯は、二段目および下段の破片であるが、下段は外表面をユビナデにより調整し、内面をユビ調整で仕上げている。

出土した円筒埴輪は焼成の度合いによって三種に大別できる。A は、須恵質と呼んでいいほどのしっかりとした焼きあがりのものである。（⑤、⑥）B は、いわゆる土師質でしっかりした焼きあがりのもの。（⑦、⑧、⑨、⑩）C は、B に近いがそれよりも軟質のものである。

（⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳）胎土は全体に粗く、5 mm から 1 cm 大の小石も少量含んでいる。

平瓦（図⑩） 破片である。

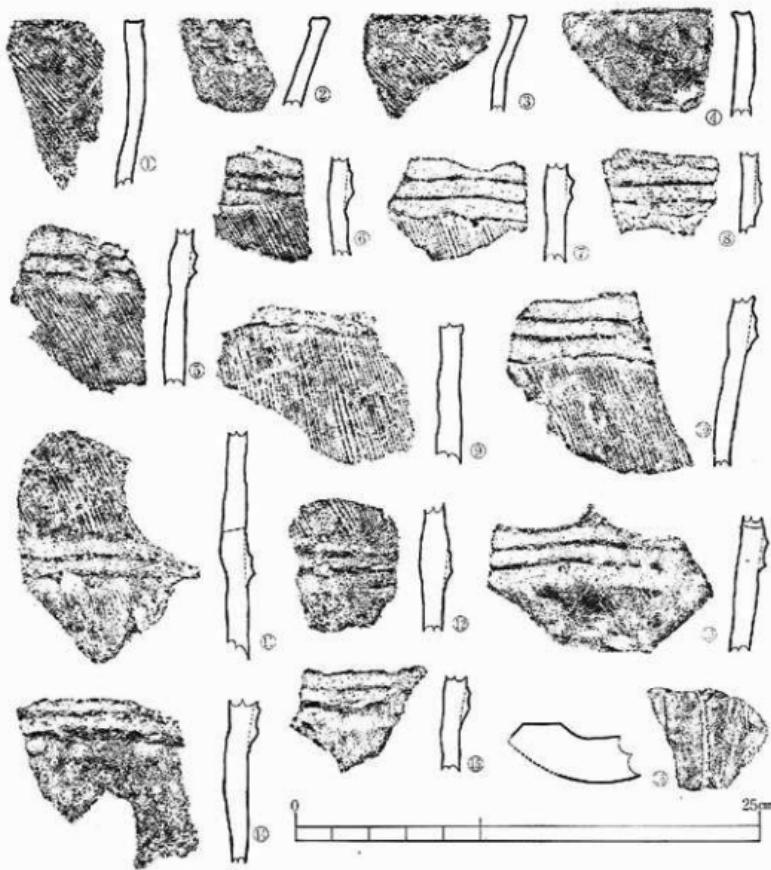
表面は布目が見られるが、裏面はナデできれいに仕上げている。これ以外に瓦類の出土はなかった。

土師器

壺 A.（図15） 外反する口頸部をもち、頸部付近に鈍い稜をもつものである。口縁端部は面をつくって終わる。口頸部は内外面ともヨコナデ、胴部外面はユビ調整、内面はヨコナデによりていねいに仕上げられている。胎土には 2 ～ 3 mm 大の砂粒を多く含んでいる。

壺 B.（図17） 外反する口頸部をもち、口縁端部は面をつくって内側に肥厚する。口頸部は内外面ともヨコナデで調整している。頸部は接合部付近に稜をもち、胴は張らない。外面は縱方向および横方向のヘラケズリ、内面はユビ調整で仕上げている。

壺 C.（図18） 外反する口頸部をもち口縁端部は面をつくるものである。頸部付近に少し張り出し気味の稜をもつ。胴部最大径と口径がほぼ同じものである。口頸部はヨコナデで内外面とも調整し、胴部外面はユビ調整、内面はていねいなヨコナデで調整している。2 ～ 7



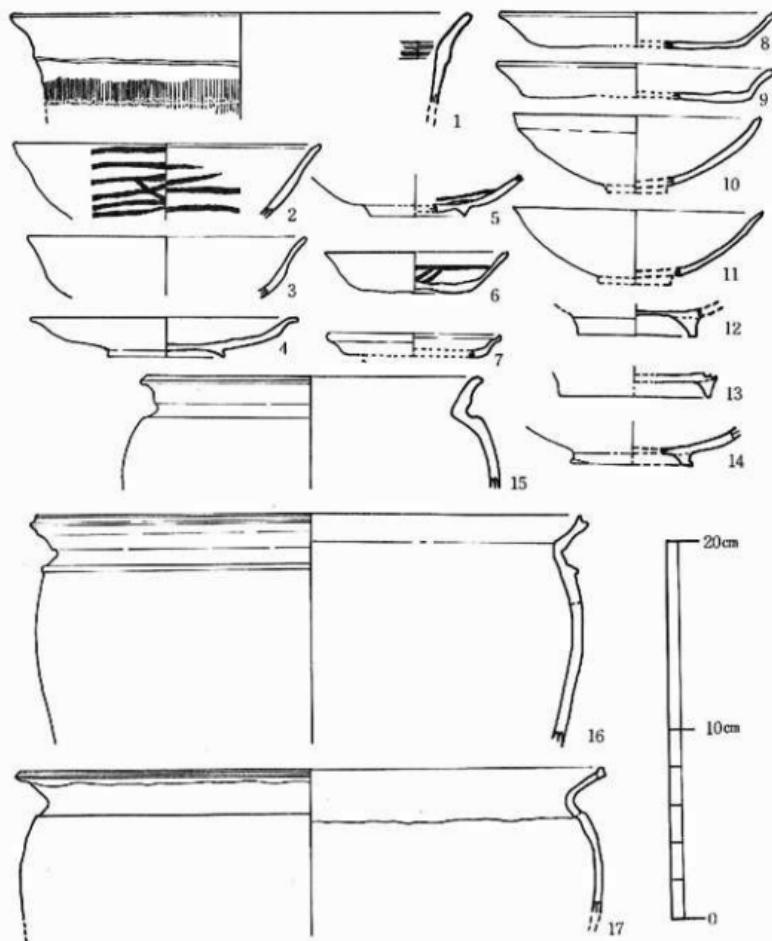
第16図 円筒埴輪拓影

mm 大の石英、長石などの砂粒を多量に含んでいる。

壺D. (図1) やや外反する口縁部をもち肩の張らないものである。口縁部は内外面ともヨコナデ仕上げ、洞部は外面を縱方向のハケメ(10条/cm)、内面を横方向のハケメ(9条/cm)で調整している。壺としたが瓶になるかもしれない。

皿A. (図8) 口縁部は底部より丸味をおびて立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデで調整し、底部は内面をヨコナデで、外面をニビナデで調整する。

皿B. (図9) 口縁部は底部より角度をもって立ち上がり、端部は角ばって終わる。口縁



第17図 Sトレント、S.1 トレント出土遺物

部内外面をヨコナデ、底部外面をユビオサエ、内面をユビナアで仕上げている。

燈明皿A. (図7) 底部より外反した口縁部が中途で角度を変えて強く外反し、端部は内側に肥厚して終わるものである。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、外面はユビ調整で仕上げられている。非常に精選された胎土を使っている。

塊A. (図10、12) 上半部および底部の破片である。それぞれ別個体の破片であるが、同

一型式のものと思われるため一つとして扱う。口縁部は角度を変えて外反するもので、端部は鋭く終わるものである。口縁部の外面はヨコナデによって調整し、それより以下は、外面をユビ調整、内面をヨコナデによって調整している。高台は、高くてしっかりと貼り付け高台である。

灰釉陶器

皿(図4) 強く外反する口縁部をもつもので、端部は丸味を帯びて終わる。底部は上げ底氣味の高台をもつ。灰釉の残りは悪く、ほとんど剥離しているが高台付近にわずかに残っている釉は、淡い緑色を呈している。胎土は、灰白色を示し軟質であるが、灰釉陶器としては普通のものであろう。調整は内外面ともナデで、ていねいに仕上げたあと釉をかけている。

口径14.2cm

黒色土器

今回の調査で出土した黒色土器は、外面が土器と同様の色をし、内面のみ黒色になっているいわゆる内黒の土器である。器種は碗のみに限られている。

碗A.(図11、14) 口縁部および底部の破片である。それぞれ別個体であるが同一型式のものであろう。口縁部は角度を変えて外反し、端部は鋭く終わる。高台は貼り付けで、低くどっしりとした感じのものである。

碗B.(図13) Aに比して高く、しっかりと貼り付け高台をもつものである。高台はヨコナデで調整している。碗の上部は接合部より剥離して欠失している。

瓦器

塊A.(図2) 上半部の破片である。口縁端部は、ややとがり気味に丸味をもって終わる。内外面ともよく灰黒色にいぶし焼きされている。

塊B.(図3、5) 上半部および底部の破片である。高台は断面三角形の簡単なものがつけられている。内面の暗文は螺旋状に走る。外面に暗文はなくユビ調整で仕上げられている。

小皿。(図6) 底部が上げ底氣味につくられたものである。口縁部内外面はヨコナデにより調整。底部外面はユビ調整、内面はナデの後、斜格子状の暗文がつけられている。

口径9.4cm

IV まとめ

今回の調査は、試掘という性格上調査範囲が狭く若干の遺構と、遺物包含層を確認するに留まった。ここでは、まとめとして遺構、遺物の順に判明した点を記しておきたい。

遺構

確認した遺構は、S.1トレンチの黒灰色粘土層をベースにした皿状の溝と、少数のピットのみであるため、この遺構の性格は不明である。また、遺構は発見されなかったがSトレンチでも黒灰色粘土層が検出されたことから、この層をベースにした遺構が付近に存在することは確実と考えられる。

遺物

出土した遺物は円筒埴輪、土師器、瓦器、須恵器等である。出土したトレンチは、大部分Sトレンチ、およびS.1トレンチである。

円筒埴輪は各トレンチから出土している。いずれも、程度の差はあるが摩滅したもので、凸帯の退化した古墳時代後期にみられる通有のものである。

黒色土器図11、13、14、土師器図1、8、9、10、12、15、16、17、灰釉陶器図4などは、形態から見てほぼ相似した時期が想定できるのではないかと考える。そしてこの遺物の時期は、黒色土器の示す年代である11世紀前後に求められると思う。また、この遺物中の土師器と同種の破片がS.1トレンチのピット、溝中より出土したことから、この遺構も同様の時期のものと考えられる。

他に、拓影の平瓦、図2、3、5、6、7の瓦器および土師器の證明皿が出土している。これらの遺物の時期は、瓦器の福垣晋也氏の編年によれば、G型式図2、H型式図3、5、6に比定され、およそ鎌倉時代中期から後期にその年代が求められる。しかし、この時期の遺構は今回の調査では確認できなかった。

以上のことから、この遺跡について考えれば平安時代後期の遺構をもつ遺跡であり、他に鎌倉時代中期から後期の遺構の存在する可能性がある。また、円筒埴輪が出土したことから付近にこの埴輪を伴う遺構の存在も考えられる。遺跡の範囲は確認できないが、調査地点より北に延びる事は考えられず、おそらく南の方に拡がっていくものと思われる。従来、この付近にこの種の遺跡が確認されていなかったことから、付近の地名をとって新たに岩田遺跡と名づけた。

最後に、今回出土した遺物の中に、摩滅しているとはいえ円筒埴輪の破片が多数出土していることについて、若干の問題を提起しておきたい。

今回の調査地点は、旧楠根川、玉串川の氾濫原であり、古代より現在に至るまで低湿地として有名な場所である。付近の式内社石田神社の境内付近に、古墳らしきものがあったという伝承もあるが、この近辺の地形からしてにわかには肯定しがたい。また、かつて調査地点より南へ900mの所で巨摩麻寺の調査を行なった際、寺の遺構より下層の所で、古墳時代後期初頭頃の円筒埴輪が今回と同じ状況で多数出土している。この付近も地形から見て古墳が存在しているとは考えがたい所である。このことは、円筒埴輪が古墳以外に使用された可能性を考えさせる。では、どのような性格をこの円筒埴輪がもつかという点について、現在の所では何らかの祭祀に用いられたのではないかという推測をもつぐらいである。具体的には、今後、この周辺の遺跡の調査が進むのを待って考えたい。

上六万寺遺跡

目 次

Iはじめに.....	(28)
II調査概要.....	(29)
III出土遺物.....	(33)
IVまとめ.....	(44)

例 言

1. 本調査報告は、田口丈太郎氏所有地の宅地造成にともなう事前調査の報告である。
2. 本調査は、昭和48年10月23日より11月2日にかけて福永信雄、勝田邦夫を担当として当調査会が実施した。
3. 調査中は、杉本哲志、飯塚典正、才原金弘、永井俊博、松田順一郎、飯塚順之、井田和太、裏野昌一、山本克之、内田和男、中島祥好の学生諸君から協力を得た。記して謝意を表する。
4. 土地所有者の田口丈太郎氏は、調査を快諾され、鉄筋建築の予定から木造建築に設計を変更して、造構の保存に深い配慮を図った。記して謝意を表する。

I はじめに

上六万寺遺跡は、近畿地方の紀文式時代の遺跡として著名な縄手遺跡の東方約100m付近に存在する。⁽¹⁾現在の地番は、東大阪市上六万寺町1丁目32番地である。この付近は、生駒山西麓の扇状地に多くの遺跡が密集する地域で、東大阪市域でも最も古く開けた場所である。上六万寺遺跡の周辺にも、南方約1,000mの所に、紀文式時代前期、および弥生式時代後期である馬場川遺跡や、北東約800m一帯には、後期の群集墳である山畠古墳群などの遺跡が存在⁽²⁾⁽³⁾している。

今回の調査は、個人の宅地造成に先立つ調査である。縄手遺跡の範囲に当該地が隣接しているため、試掘調査の依頼が東大阪市教育委員会より当調査会にあった。

当調査会は、何らかの遺構、および遺物包含層が存在する可能性が高いとしてこの試掘調査を受諾することを決定し、昭和48年10月23日より11月2日にかけて調査を実施した。

この報告は、以上の試掘調査の結果をまとめたものである。



第18図 上六万寺遺跡周辺地形図 1:10000

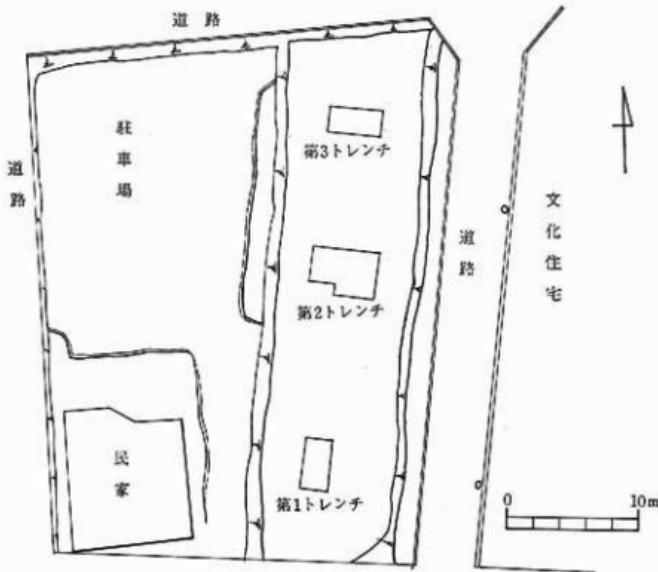
II 調査概要

調査地点は、縦38m、横10mのほぼ長方形の芋畑であった。この芋畑に 2×4 mのトレンチを設定し、各トレンチを南より第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチと名づけて調査を開始した。以下各トレンチごとに説明を行なう。

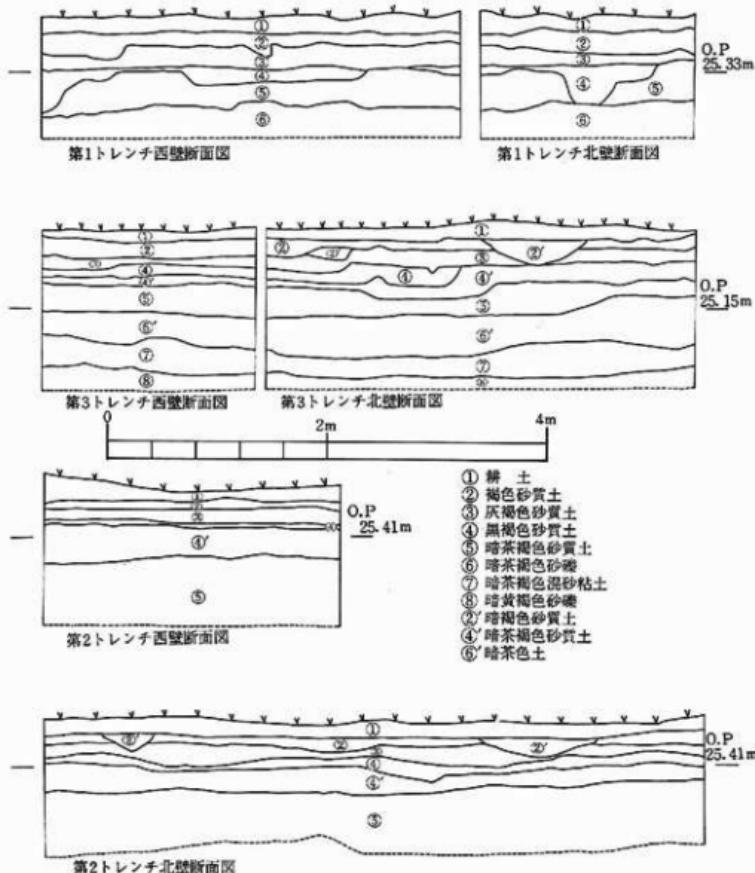
第1トレンチ

層位は、上層より耕土、褐色砂質土、灰褐色砂質土、黒褐色砂質土、暗茶褐色弱粘質土、暗茶褐色砂礫の各土層より形成されている。

遺物は、耕土より暗茶褐色弱粘質土層まで含まれているが、主たる包含層は黒褐色砂質土層である。この層に含まれていた遺物は、瓦器、土師器が主なもので、それに少量の須恵器、陶器などである。また、第5層の暗茶褐色弱粘質土層をベースにして、幅約80cm、深さ約40cmの溝がほぼ南北に走ることを確認したが、隣接して設定した第2トレンチでは確認されなかったことと、トレンチの規模が小さいことから、この溝の性格、および長さなどを究明することができなかった。なお、このトレンチからはほとんど弥生式土器は出土しなかった。



第19図 調査地点平面図



第20図 第1、第2、第3トレンチ断面図

第2トレンチ

このトレンチも、当初は他のトレンチと同様 2×4 mで設定したが、石組を検出したので、図19に示したようにトレンチを拡張した。

層位は、上層より耕土、褐色砂質土、灰褐色砂質土、黒褐色砂質土、暗茶褐色砂質土、暗茶褐色弱粘質土の各土層より形成されている。主たる包含層は、黒褐色砂質土層、茶褐色砂質土層、暗茶褐色弱粘質土層である。この第2トレンチでも暗茶褐色弱粘質土層をベースにして、

敷石をもった石組井戸を確認した。この井戸の上面の直径は約90cmで、自然石を積み上げて井戸を作っている。井戸の底付近は、直径約40cmの丸木をくりぬいて井戸枠としていた。井戸を2mまで掘り下げたところで、井戸の底がせまいため調査が困難になり、最終的に深さの確認はできなかった。しかし、およそ2m50cm内外であると思われる。また、付属した敷石は、20~40cm大の不整形な自然石で、面をそろえて置いていた。特に掘り方などは検出できなかった。

この敷石はおそらく井戸に伴うものであろうが、どのような性格をもつものかは確認できなかった。井戸の周囲の敷石上で鉄釘が2本出土した。これは井戸に廐屋などの付属施設があった可能性を想定させたが、他に何らこれを積極的に証明できるようなものは見いだせなかった。

井戸の内部より瓦器や瓦質の土釜などが出土したが、底までいたらなかったこともあり、井戸に対するまつりが行なわれたかどうかは不明である。

このトレンチからは瓦器、土師器をはじめとして、須恵器、陶磁器、弥生式土器などが出土した。

第3トレンチ

層位は、上層より耕土、褐色砂質土、灰褐色砂質土、黒灰色砂質土、暗茶褐色砂質土、暗茶褐色弱粘質土、暗茶色土、暗茶褐色混砂粘土、暗黃褐色砂礫の各層より形成されている。

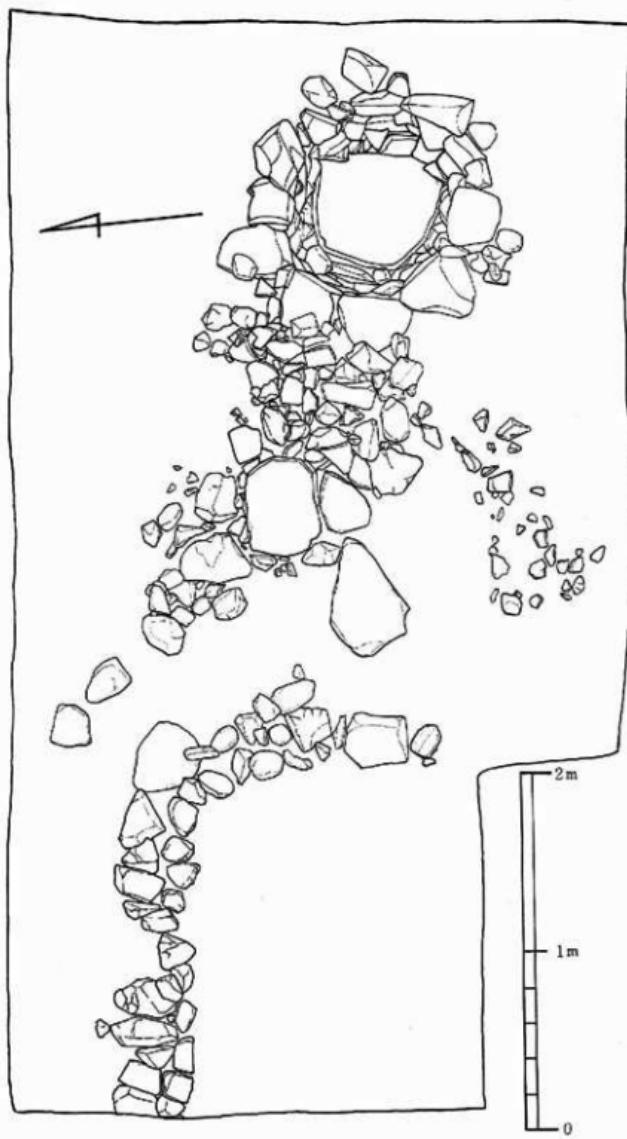
遺物は、黒褐色砂質土層から暗茶褐色混砂粘土層までに含まれている。第1、第2トレンチで中世の遺構のベースになっている暗茶褐色弱粘質土層では、遺構が検出されなかつたが、この層より下層の暗茶色土層、および暗茶褐色混砂粘土層の二層に集中して多量の弥生式土器と少量の瓦器、磁器が出土した。この出土状況は、東方より流れ込んで堆積した二次地盤の様子を示していた。この両層より下層の暗黃褐色砂礫層には、まったく遺物を含まず、他の付近(4)の遺跡の例から見てもこの層が地山と考えられる。

注(1) 挿手遺跡調査会『繩手遺跡1』 昭和46年刊。

(2) 東大阪市教育委員会『馬場川遺跡調査概報Ⅱ』 昭和45年刊。

(3) 東大阪市教育委員会『山畑古墳群Ⅰ』 昭和48年刊。

(4) 馬場川遺跡、繩手遺跡などがその例である。



第21図 石組井戸平面図

III 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、弥生式土器、土師器、須恵器、陶磁器、砥石、鉄釘など調査範囲が限定されたにもかかわらずかなりの量にのぼる。特に、第3トレンチを中心に出土した弥生式土器は、弥生式時代後期の一括資料として重要なものである。ここでは、ほぼ年代順に、出土した遺物を説明することにする。

弥生式土器

弥生式土器は二次堆積による出土であるが、各器種が出土している。いずれも畿内第V様式の特徴をもつものである。ここでは器種別に分けて説明した。なお、いずれの土器にも共通の整形手法、および胎土をもつものは特別なものを除いて説明は省いた。胎土は、いずれも河内山麓部の土器として通有のものである。

壺（図3） 短い直立する頸部から強く外反する口縁部を有するとと思われるもので、肩部に、同原体で直線文と波状文を組合せた櫛描き文を有する。胴上半内面の接合部付近をハケメで調整したのち、頸部内面をあわせてユビ調整している。表面の摩滅が激しい。第2トレンチ出土。

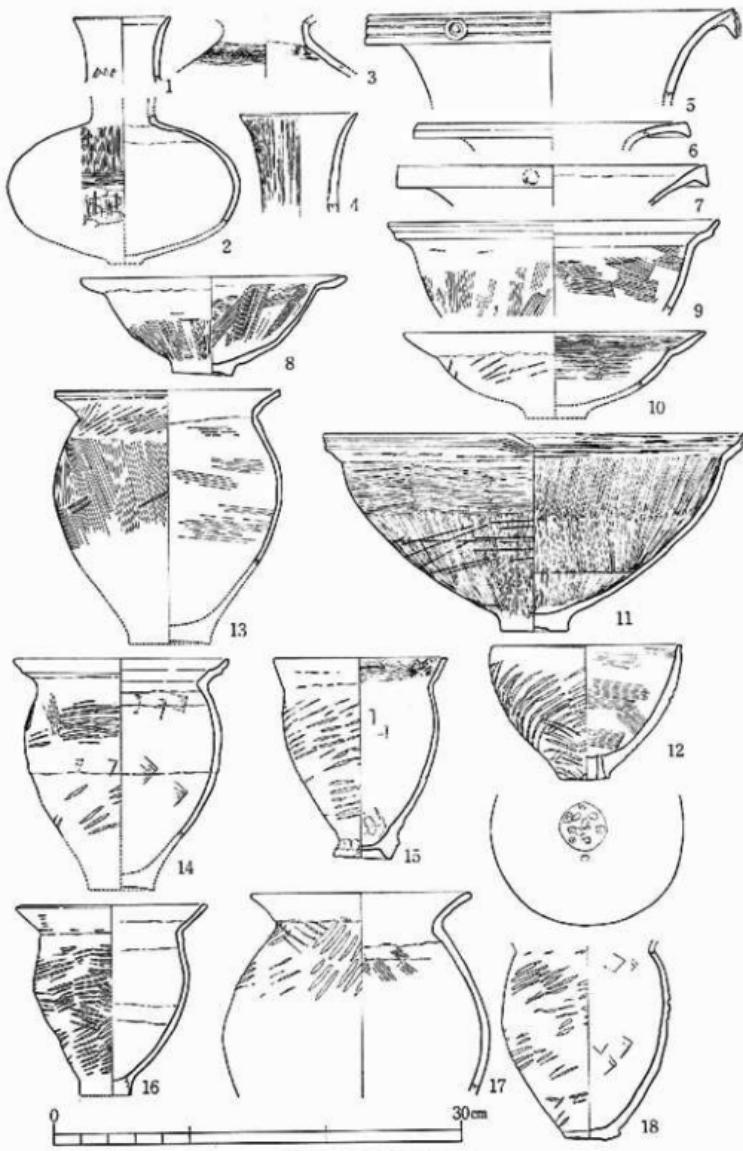
細頸壺（図1、2、4） 2は、扁球形の器体に細長い筒形の口頸部をもつと思われるものである。頸部、胴部ともに細かいヘラミガキを施しているが、胴部下半は横方向にヘラケズリをしたのち、縱方向のヘラミガキを施している。内面はユビ調整で仕上げている。1、4は、口縁端部に幅の狭いヨコナデをもつ。1は、頸部外面にハケメを施して調整している。4は、外面に縱方向のヘラミガキをもつ。1は第2トレンチ、他は第3トレンチ出土。

鉢A（図8、11） 口縁部は外反するが、口縁端部は角度をかえて立ち上がるるものである。11は、口縁端部外面に二条の凹線を施し、片口様の口縁をもつ。内外面とも細かいヘラミガキを全面に施したもので、底部は軽く上げ底気味である。第3トレンチ出土。

鉢B（図8、10） 口縁が強く外反し外側におり返したためか、肥厚して終わるものである。8は、器体外面に縱方向の細かいヘラミガキ、内面はハケメによって調整したのち、部分的に縱方向のヘラミガキを施している。底部はやや上げ底気味にユビオサエで仕上げている。10は、外面は左下がりのタタキを施したのち、ナデにより消している。内面は横方向のヘラミガキによって調整している。第3トレンチ出土。

鉢C（図12） 直口した口縁をもつものである。底部に外側から穿孔した穴を十二個もち、そのうち二個は貫通していない。口縁端部は丸くおさまり、底部外面に右下がりのタタキを施したのち、再度口縁部付近まで左下がりのタタキを施している。内面は右から左に横方向と斜行するハケメで調整している。第3トレンチ出土。

器台A（図5） 口縁部付近の破片しか出土していないため全形は不明である。口縁部を下



第22図 弥生式土器

方におり返し、口縁側面は三条の右から左につけたヘラ描きによる沈線をめぐらし、竹管文を付した一個の円形浮文を貼り付ける。内面は横方向のヘラミガキ、外面は縦方向のヘラミガキにより調整している。第3トレンチ出土。

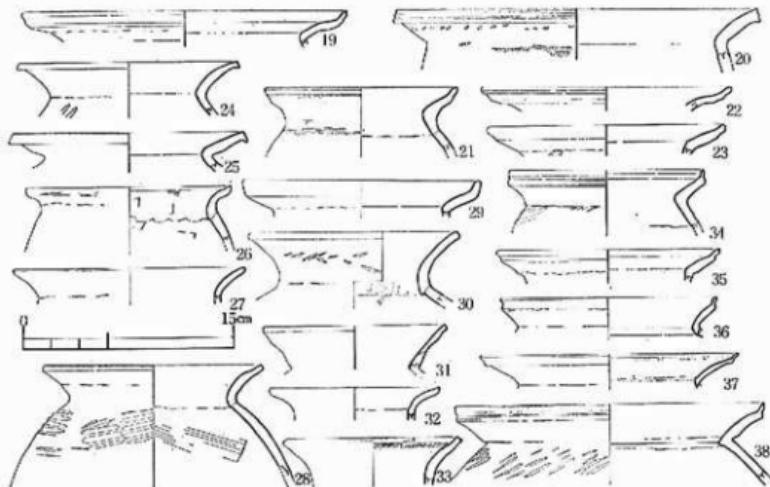
壺台B (図6、7) 二個とも口縁部の破片である。壺台としたが、あるいは壺の口縁部になるかもしれないものである。口縁部端面は装飾性に乏しく、Aにくらべて小型のものである。6は、口縁端部中央がわずかにふくらむものである。内面は横方向のヘラミガキによって平滑に仕上げ、外面はナデによって仕上げている。7は、口縁部端面に円形浮文をおしつけ、かつその部分がくぼんでいるもので、円形浮文は剥離しているが、おそらく竹管文を付したものであろう。破片が小さいため円形浮文が一個あるいは二個ついていたのかは不明。内外面ともヘラミガキで調整している。第3トレンチ山上。

壺A (図15、16、18) 外面全体にタタキを施したのち頸部付近をしばって口頭部を作り出したもので、口縁端部は角張って終わる。最大腹径が器体中位よりやや上にあるものである。15は、口頭部の調整にヨコナデを施し、細かいハケメをジグザグに使って調整している。全体に左下がりの粗いタタキ(2条/cm)を施している。内面は横方向のハケメで調整、底部は指でわずかにつまみだして作ったと思われる上げ底氣味のものである。16は、口頭部外面にユビオサエを施したことによりタタキが消されている。外面全体に比較的細かい(4条/cm)左下がりのタタキを施したのち、器体中位付近に右下がりのタタキを重ねて施している。全体にタタキの原体は同一のものを使用している。内面はハケメを施したのちユビオサエで調整している。器体中位より下は煤が付着している。18は、口縁部を欠いているが不安定な平底をもつ。土器底部より左下がりのタタキを上部に向って施したのちナデにより消している。内面は左下がりのハケメを施したのちユビオサエで調整している。第3トレンチ出土。

壺B (図13) Aと形態は同じである。しかし、やや大型で口縁のヨコナデが丁寧でしっかりと仕上げである。外面全体を左下がりのタタキを施したあと、肩部以下を縦方向のハケメでかき消している。内面は横方向のハケメで調整している。肩部以下に煤の付着が見られる。口径16.5cm。第3トレンチ山上。

壺C (図14) 頭部は外反し、途中で角度をかえて立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は丸みをおびている。肩部は水平方向のタタキを施したのち、一部を縦方向のハケメで消している。器体下半は左下がりのタタキを施したのち、丁寧にナデにより消している。内面は右下がりのハケメで調整。外面全体に煤が付着している。第3トレンチ出土。

壺D (図17) 口頭部が外反し、口縁端部はやや角張って終わるものである。口径よりも腹径が大きく、最大腹径が器体中位に位置する。外面は左下がりの粗いタタキ(2条/cm)を施し、内面は斜方向のハケメで調整している。17は、比較的砂粒を多く含んだ土器であるが、頸部付近にのみ右下がりの比較的細かいタタキ(4条/cm)を施している。口頭部外面はハケメを縦方向に施して調整している。第3トレンチ出土。



第23図 弥生式土器 壺・壺口頸部

壺・壺口頸部

出土した壺・壺口頸部付近の破片が三十点近くある。この中でタイプ別に分類することができるなので、ここでE～Kの各タイプにわけて分類してみたい。

壺口頸部 E (図19、22、23) 強く外反する口頸部をもち、口縁部付近で一、二度角度を変えて立上がる。口縁端部は丸味をもって終わる。23は、頸部付近に左下がりのタタキが残る。内外面ともヨコナデで仕上げる。第3トレント出土。

壺口頸部 F (図24、25) 外反する口頸部をもち、口縁端部は下方に垂れ下がる。24は、頸部付近に左下がりのタタキを施す。第2トレント出土。

壺口頸部 G (図26、27、28) 外反する口頸部をもち、口縁端部は丸味をもって終わる。26は、頸部付近から内面をハケで調整している。28は、頸部以下右から左下がりのタタキを施す。内面は1.9cmの幅をもつハケメ原体を右下がりにもちいて調整している。第3トレント出土。

壺口頸部 H (図21、29) 外反する口頸部が口縁部では直立気味に立ち上がるものである。口縁端部は丸味をもって終わる。21は、頸部外面に幅2.2cmで十条のハケメ原体による調整を施す。第3トレント出土。

壺口頸部 I (図34、38) 外反する口頸部が口縁部で角度を変えて立ち上がる。口縁端部は鋭く終わる。口縁部外面に凹線様のものが一本めぐる。38は、大型で口径22cm。第3トレント出土。

壺口頸部 J (図35、36、37) 外反する口頸部が口縁部で再度、角度を変えて外反するものである。口縁端部は丸味をもって終わる。37は、他に比して器壁の薄いものである。第3トレンチ出土。

壺口頸部 K (図20) 外反する口頸部をもつ。口縁端部は角張って終わり、そこに二条の沈線がめぐる。口縁部付近にヘラによる不規則な剣突文がめぐる。口径 25.6cm。第3トレンチ出土。

壺口頸部 A (図30、31) 外反する口頸部をもち、口縁端部は角張って終わるものである。30は、口縁部付近にヘラ先による刻み目が見られる。第3トレンチ出土。

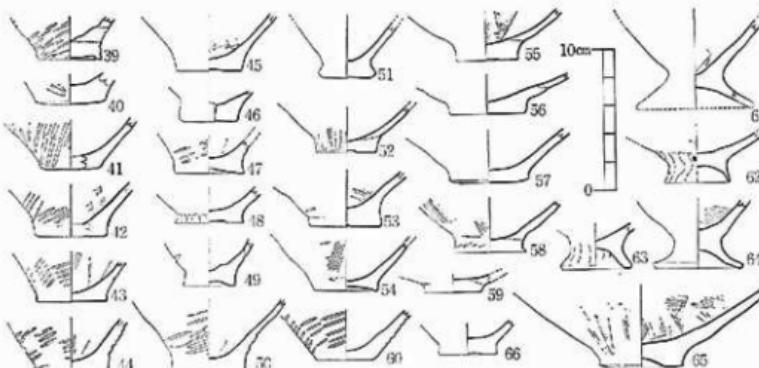
壺口頸部 B (図32、33) 外反する口縁部で、端部は角張って終わる。頸部付近を欠いているが、おそらく直立した頭部をもつものであろう。33は、口縁端部内面付近をハケメにより調整している。第3トレンチ出土。

底 部

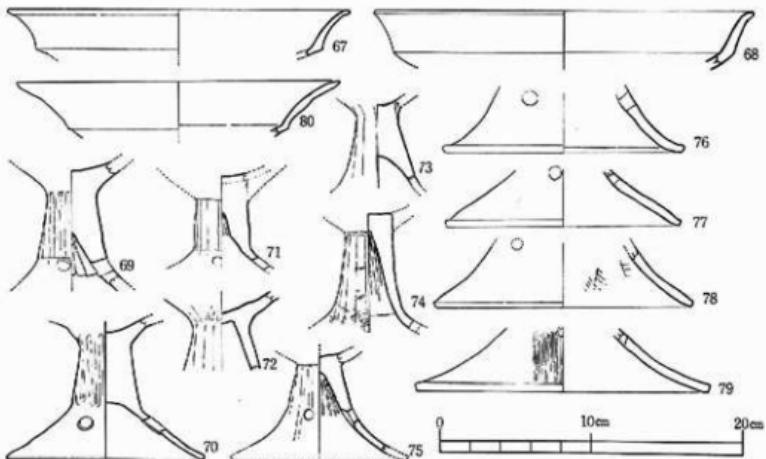
出土した底部の破片は、約40点であるが、底部のみでは器形の判別がつけにくいので、ここでは底部のみでA、B、Cのタイプに分けて説明したいと思う。

底部 A (図39、40、41、42、43、44、47、49、50) 外面に左下がりのタタキをもつもので、平底のものと上げ底のものの二種ある。内面はいずれもハケメによって調整している。39、41は、底部ぎりぎりまでタタキを施している。41、42は第2トレンチ出土、他は第3トレンチ出土。

底部 B (図45、46、48、51、52、53、54、55、56、57、58、59、65、66) 外面にタタキをもたないもので、平底のもの、上げ底のもの、底部中央がくぼんだいわゆるドーナツ底のものがある。内面は、確認できたものの全部がハケメで調整している。54は、外面をハケメで調整



第24図 弥生式土器 底部



第25図 弁生式土器 高杯

し、58は、左下がりのタタキを施したのちに、ハケメを施し、そのちにナデにより調整している。53は、左下がりのタタキを施したのちナデにより調整している。52、65は、外面をヘラミガキで調整している。45、46、51、57、66は第2トレンチ出土、他は第3トレンチ出土。

底部 C (図61、62、63、64) 高台状の底部をもつものである。62は、高台の端部がとがり気味に終わるが、他は丸みをもって終わる。内面はすべてハケメによって調整されている。62、63は、底部より高台をひねり出した際についたと思われる指頭圧痕が顕著に残る。62、63は第2トレンチ出土、他は第3トレンチ出土。

高 杯

高杯の杯部、脚部の破片はそれぞれ少数出土しているが、全形をうかがうことができる資料がない。ここでは杯部と脚部にわけて説明する。

杯部 A (図67) 曲折点より外反して口縁端部にいたる。口縁端部は丸く下方に張り出しで終わる。内外面ともヨコナデのあとへラミガキによって仕上げている。

杯部 B (図68) 曲折点より外反し、口縁端部は丸みをもって終わる。曲折点外側の稜はあまりはっきりしない。内外面ともヨコナデのあと、外面のみにヘラミガキをかけている。

脚部 A (図72、74、75) 脚柱部が上端近くまで中空であるもので、柱状部と裾部の境が明確化しないものである。脚台には三個の円孔をあけている。72は、内面はユビナデ、脚柱部外面はヘラミガキ、杯部と脚との接合部付近はヘラケズリで整形されている。74は、外面は上から下へのハケメののち、縱方向のヘラミガキ、内面はユビナデにより調整している。しばりめがよく残る。75は、外面を縱方向のヘラミガキ、内面をハケメで調整している。

脚部 B (図69、70、71、73) 脚柱部がおおむね中程まで中空のもので、脚柱部と脚裾部に明確な屈折をもつものである。脚端部はやや角張る。Aと同様、脚裾部に三孔をあける。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はユビ調整である。70、73は、しばりめをもたない。

脚裾部 (図77、79) 脚端部が丸味をおびるもの77と、角張るもの79の二種ある。外面を縦方向のヘラミガキで調整し、脚部、および内面をヨコナデで調整している。

中世の遺物

中世の遺物は他の同時期の遺跡から出土する遺物と大差ない。ここでは器種別に説明していく。

鍊鉢 A (図1、2、3、4、5) すべて須恵質で、口縁部が上下に拡張するものである。5は、片口の鉢になる。3は、外面にうすく煤が付着している。1は第2トレンチ井戸内出土、3、4、5は第2トレンチ出土。

鍊鉢 B (図6) 須恵質の鉢で、口縁部は上下に拡張しないものである。端部は丸味をもって終わる。口径27.6cm。第2トレンチ出土。

土釜 A (図14、15) 土師質で口縁部が外反し、端部がわずかに内面に肥厚するものである。胎土は粗い砂粒を多く含む。14は第3トレンチ出土、15は第2トレンチ出土。

土釜 B (図16、17、18) 土師質で、口縁部が外反し端部が内側に折れ込むものである。17は、肩部付近に稜をもつ。16は、内外面ともヨコナデにより調整している。17は第2トレンチ出土、16、18は第3トレンチ出土。

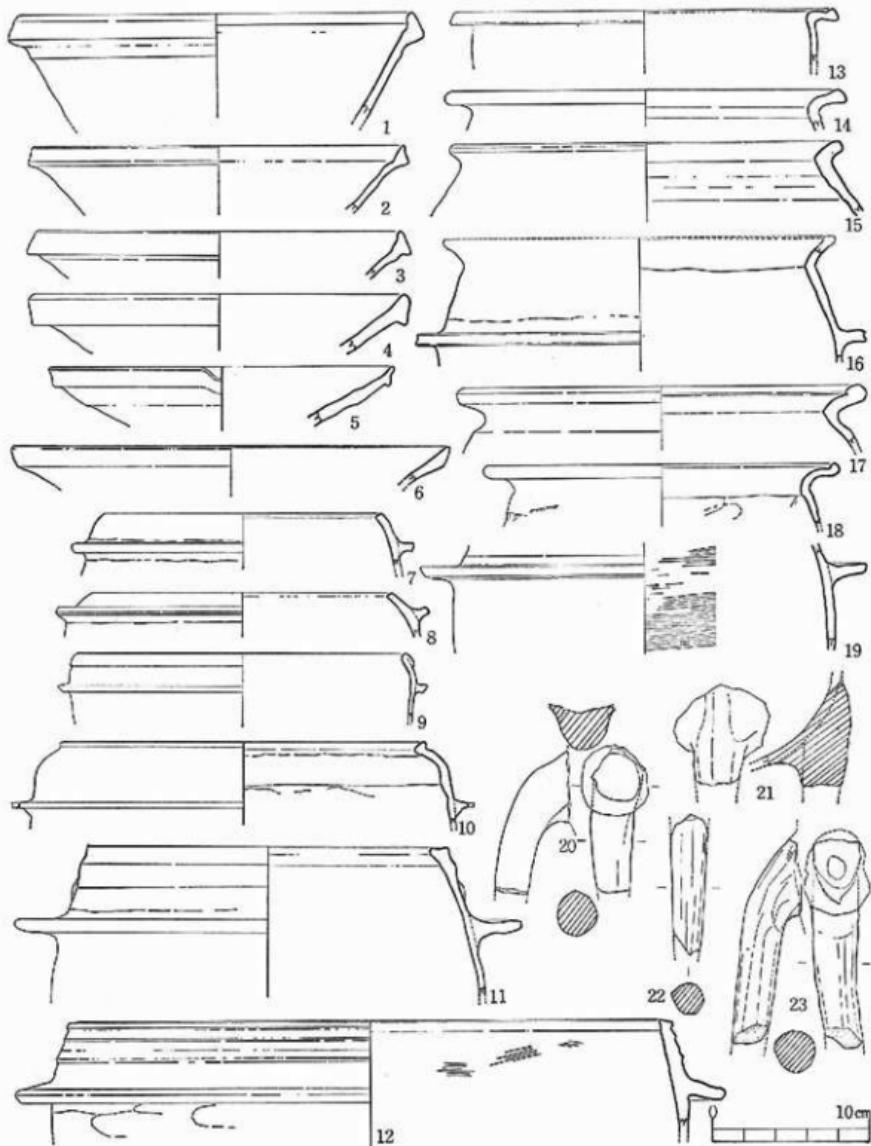
土釜 C (図7、8) 土師質で、口縁部が内反し端部が角張って終わるものである。小型のもので、鉢は水平につくもの7、上向きにつくもの8がある。7は第2トレンチ出土、8は第3トレンチ出土。

土釜 D (図9、10) 土師質で、口縁部が内反する。口縁端部は肥厚するもの9と外側に折りこまれるもの10がある。鉢はほぼ水平につけられている。内面はヨコナデで仕上げている。9は第2トレンチ井戸内出土、10は第3トレンチ出土。

土釜 E (図11、12、19) いずれも瓦質で、内傾する口縁部の外面に二、三本の稜をもつものである。口縁端部は面をつくって終わる。19は、腹部の破片で、内面をハケメで調整している。12は、鉢より下の外面をヘラケズリで仕上げている。鉢はほぼ水平なもの11、19と下向きのもの12がある。よく使用されたものと見え、鉢より下半は煤が厚く付着している。第2トレンチ出土。

土釜 F (図13) 土師質のもので、口縁部が水平にまで外折したものである。口縁端部は肥厚して終わる。外面はヘラケズリで仕上げている。第2トレンチ出土。

三足器 (図20、21、22、23) 瓦質のもので、脚だけが出土している。脚外面にヨコナデによる調整のため残ったと思われる稜をもつもの21、22、23と、丁寧な仕上げで稜を残さないものの二種が見られる。20は、よく使用されたと見え、外面全部に煤が付着している。20は第2



第26図 瓦質土器、土師質土器

トレンチ井戸内出土、21、22、23は第2トレンチ出土。

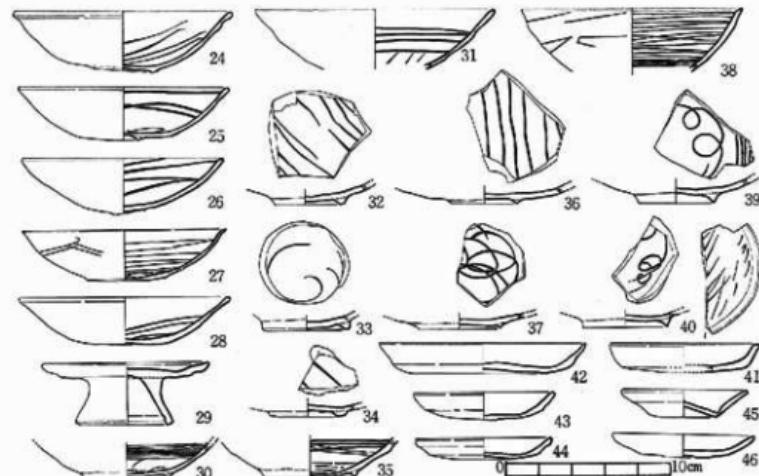
瓦 器

瓦器は第1トレンチ、第2トレンチを中心に出土している。器種は一点の小皿を除いてすべて塊である。ここではタイプ別に分けて説明する。

瓦器塊 A (図30、32、33、34、35、38、39、40) 口縁部、および底部の破片である。口縁端部内面には一本の沈線がめぐる。高台は断面が三角形を呈するものと台形を呈するものがある。いずれも比較的しっかりとした貼り付け高台である。38は、外面にわずかな暗文をもつ。33、39、40は、見込み部に連續輪状文をもつ。33のみ第3トレンチ出土、他は第2トレンチ出土。

瓦器塊 B (図24、25、26、27、31、36、37) 完形品を含んでいたため全形を知ることができる。高台が退化してわずかに残存するが、高台としての役を果すものは少ない。高台は、Aと同様断面が三角形を呈するものと台形を呈するものがある。24は、内面に粗い平行線の暗文をもつ。27は、口縁端部内面に一本の沈線をもつが、他は口縁端部が丸味をもって終わるものである。器高指数はいずれも27前後である。26は第1トレンチ出土、25、27、36、37は第2トレンチ出土、24は第3トレンチ出土。

瓦器塊 C (図28) 高台が完全に退化したもので、口縁端部は丸味をもって終わるものである。内面には粗くてうすい螺旋形の暗文がめぐる。器高指数24、第2トレンチ出土。



第27図 瓦器、土師質土器

瓦器小皿 A (図41) わずかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は角張って終わる。見込み部に細い不規則な暗文をもつ。全体にヨコナデで丁寧に仕上げている。第2トレンチ出土。

土師器

土師器の皿は小型のいわゆる燈明皿と、中型の皿が出土している。小型の皿の多くは油かすが付着し、燈明皿であったことを裏付けている。また、一点だけではあるが台付の皿が出土している。

燈明皿 A (図43、44、46) 底部中央がやや上げ底気味のものと、そうでないものの二種ある。口縁端部は丸味をもって終わる。口径はいずれも8cm強である。43、46は第2トレンチ出土、44は第3トレンチ出土。

燈明皿 B (図45) 底部中央が瓶端に上げ底気味になるもので、口縁端部は角張って終わる。第2トレンチ井戸内出土。

皿 A (図42) 外反する口縁部が角度を変えて立ち上がるもので、口縁端部は鋭く終わる。底部はやや上げ底気味のものである。口径12.6cm。第3トレンチ出土。

台付皿 A (図29) 小皿に中空の台を貼り付けたものである。口縁端部は丸味をもって終わり、台の端部は角張って終わる。内面に凹線がめぐる。これ一点の出土である。第3トレンチ出土。

その他の遺物

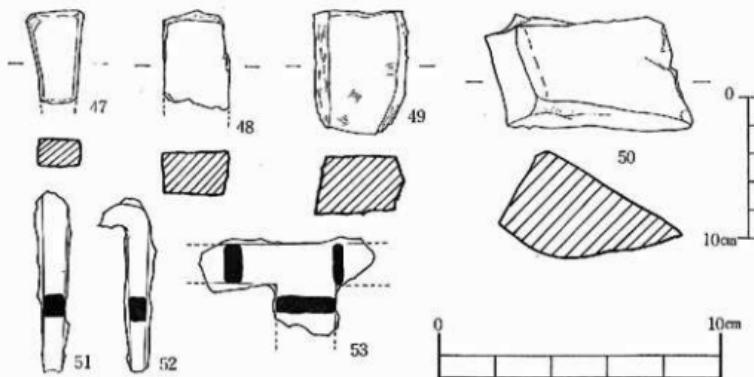
上記の他に砥石、鉄製品、磁器などが出土した。また、少数の古墳時代の須恵器、土師器などが出土地していいる。

砥石 (図47、48、49、50) 47は、横断面が長方形を呈し、うち四面とも使用によって平滑になっている。48は、横断面が長方形を呈し、うち二面が使用によって平滑になっている。49は、横断面が五角形を呈し、うち二面は使用によって平滑になっている。使用面に擦痕が認められる。50は、横断面が三角形を呈し、一面のみが使用によって平滑になっている。使用面の一部、および側面に煤が付着している。47、50は第2トレンチ出土、48、49は第3トレンチ井戸内出土。

鉄製品 (図51、52、53) 三点出土しているが、うち二点51、52は断面方形の鉄釘である。53は、T字状を呈する破片で、断面は扁平なものである。用途は不明。第2トレンチ出土。

磁器 (図版38) 青磁、および白磁が約十点出土している。いずれも碗の破片である。第1、第2、第3トレンチからそれぞれ出土。

須恵器、土師器 (図版38) いずれも数点ずつ出土しており、須恵器は長脚2段透しの高杯の破片が出土している。土師器は瓶などの把手が出土している。



第28図 磚石(47)、鐵製品(51)

IV ま と め

今回の調査は限られた範囲であったため、遺跡の範囲など不明な点も多い。しかし、検出した事実も一、二に留まらない。とくに出土した遺物の量は、小範囲の調査にもかかわらず中世の土器、陶器類をはじめ、弥生式土器などかなりの量にのぼっている。

ここでは、まとめとして遺構、遺物の順に判明した点、および今後における問題点などを記しておきたい。

遺 構

確認した遺構は、第1トレンチをほぼ南北に走る溝と、第2トレンチの石組井戸、およびそれに伴う敷石である。特に石組井戸は東大阪市域において初の出土例である。

平野部においては、従来より曲物の井戸や土釜を転用して井戸枠とした井戸などが多数発見されているが、他の構築法による井戸はほとんど発見されていない。これは遺跡の立地条件による違いかとも思えるが、調査例が少ない現在、早急に判断を下すことは避けたい。また、井戸に伴う敷石がどのような性格をもつものか、にわかに決しがたいが、これも今後の調査例が増加することによって明らかになると考えられる。

遺 物

出土した遺物は、弥生式土器、土師器、須恵器、陶磁器、鉄釘等である。弥生式土器は第2、第3トレンチで出土しているが、特に、第3トレンチからは集中的に出土している。

この出土状態は流れ込みによる二次堆積を示していた。同様の出土状況を最近の馬場川遺跡

の調査で確認したが、環状地末端部に通有のものであろうか。この弥生式土器が畿内第V様式⁽²⁾の後半にあたる時期のものであることは、すでに都出比呂志氏によって公表されている。この見解が妥当なものであると考えるが、細部にわたる考察はここでは避け、資料を提示するだけに留めたい。

次に中世の遺物である。この時期の遺物は第2トレンチを中心に出土している。この時期の年代を決定する指標となる瓦器塊、および土釜は、瓦器塊が白石太一郎氏編年の5、6、7型式に、⁽⁴⁾ 稲垣晋也氏編年のG.H.I型式に比定され、土釜が伊藤久嗣氏編年のA型式に、⁽⁵⁾ 稲垣氏⁽⁶⁾ 編年の第2、第3期のA型式、およびB型式と、第6期E型式に比定される。

それではこの遺物の年代であるが、瓦器塊の年代は、白石氏は12世紀後半から13世紀初頭に比定され、稻垣氏は14世紀前後に比定されている。土釜の年代は伊藤氏、稻垣氏とも14世紀前後に比定されている。ここで白石氏と稻垣氏の年代差が約100年のへだたりがある。そこで線跡の型式に注目してみたい。線跡は口縁部が上下に拡張する型式である。この型式は備前焼、⁽⁸⁾ 亀山焼の型式を採用すれば、鎌倉時代後半から室町時代の中頃に比定されているものである。これらのことをふまえて、ここでは稻垣氏の編年を採用し、鎌倉時代後半から南北朝の時期に遺物の年代を比定したい。ただ、土釜で稻垣氏編年の第6期E型式に比定されるものが4点出土しているが(図11、12、13、19)、これらは井戸の内部より出土したものである。年代は15世紀の後半から16世紀初頭に比定されるものである。

以上の点を通してこの遺跡に対する見解を述べれば、発見された遺構のうち、石組井戸、および敷石は少なくとも鎌倉時代後半には使用されており、敷石などの敷設は南北朝頃にすでに使用が中止されたが、井戸のみが室町時代の中頃まで使用されたと考えられる。ただ、室町時代中頃の遺物は、今回の調査では井戸からの出土のみであるため、この時期の遺構は確認できなかった。

従来、この付近において中世の遺跡は確認されておらず、今回出土した弥生式土器の型式をもつ遺跡も確認されていなかった。よって、この付近の地名をとり調査地周辺を上六万寺遺跡と命名した。この遺跡は縄手遺跡と性格を異にするため、調査地点より西の方には広がらず、遺物の出土状況から考えて東の山麓部の方に広がっていると考えられる。しかし、確実な範囲⁽⁶⁾は不明である。今後、付近の調査が行なわれるにしたがって明らかになってくるであろう。

注1) 昭和47年冬に、当調査会が行なった若江遺跡等の調査で確認した。

(2) 昭和49年夏に、東大阪市教育委員会が行なった馬場川遺跡の調査で確認した。

東大阪市教育委員会、『馬場川遺跡Ⅲ』 昭和50年刊。

(3) 都出比呂志、『古墳出現前夜の集団關係』『考古学研究』No.80所収 昭和49年刊。

(4) 白石太一郎、「いわゆる瓦器に関する二、三の考察」『古代学研究』No.54所収 昭和44年刊。

(5) 稲垣晋也、「法隆寺出土の瓦器塊」『大和文化研究』No.6-4所収 昭和38年刊。

(6) 伊藤久嗣、「元興寺極楽坊出土の羽釜形土器」『元興寺仏教考古資料研究所年報』 昭和42年刊。

(7) 稲垣晋也、「法隆寺出土資料による土釜の編年」『大和文化研究』No.7-7所収 昭和37年刊。

- (8) 間壁忠彦、「備前焼研究ノート(1)(2)(3)」「倉敷考古学研究集報1号・2号・5号」昭和41年刊他。
- (9) かつて、調査地点の東方約300mの藤井直正氏方で櫛工事の廬、弥生式土器が出土した。この土器は、鉢、瓶、高杯などで今回の調査で出土した土器と同一型式をもつものである。このことから、東へ少なくとも300mは広がる可能性が考えられる。

図 版

鬼 塚 遺 跡

図版1 鬼塚遺跡



調査以前の状況（北より）



調査地点全景（北より）

図版2 鬼塚遺跡



HO 3地区遺物土出状況（南東より）

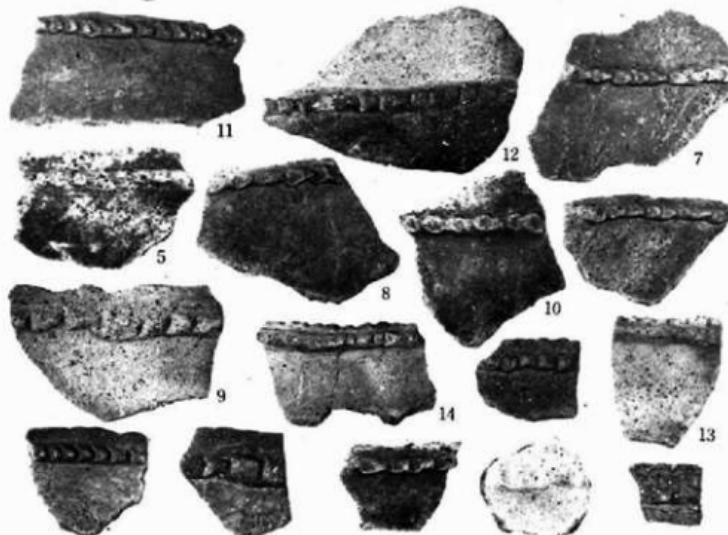


HO 3地区遺物土出状況（北より）

図版3 鬼塚遺跡



縄文式土器 (1:2)

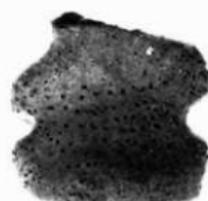


縄文式土器 (1:2)

圖版4 鬼塚遺跡



9



10



11



12

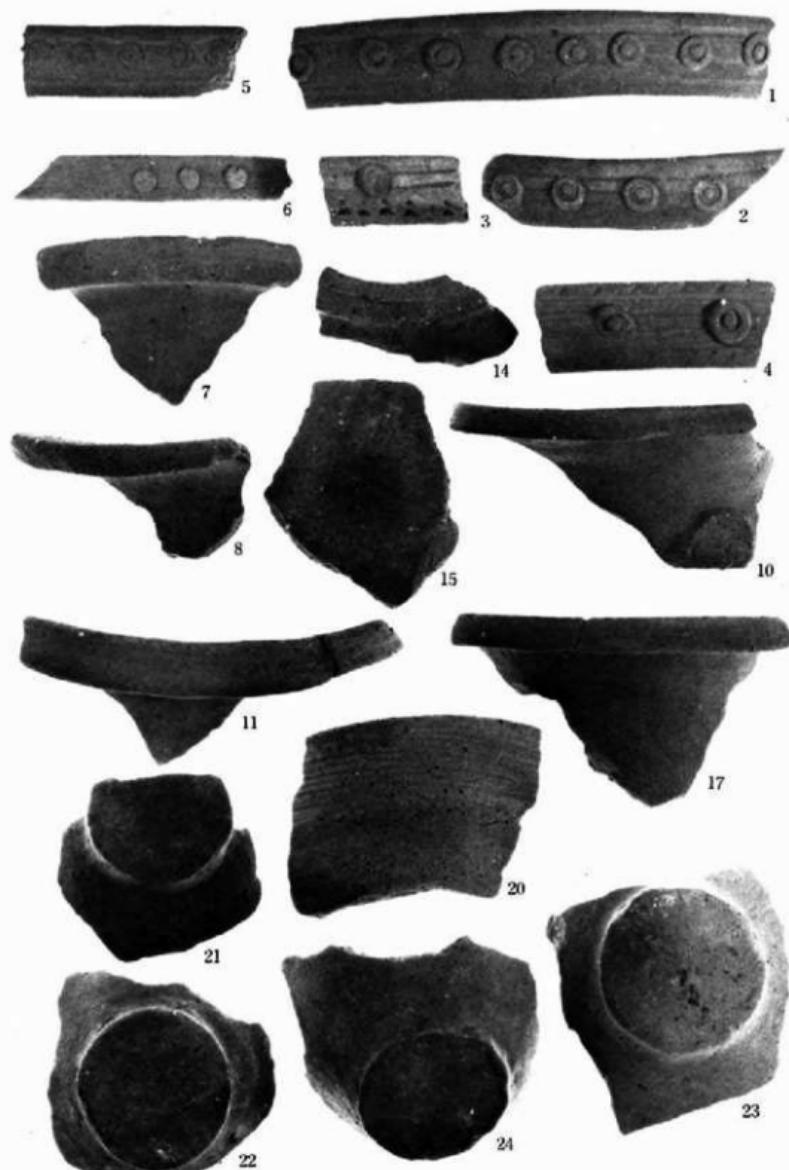
土偶 (1:2)



13

弥生式土器 (1:2)

図版5 鬼塚遺跡

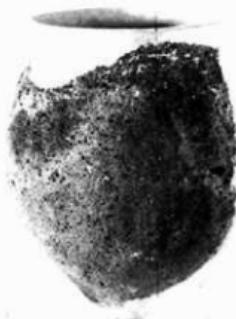


弥生式土器 (1:2)

図版6 鬼塚遺跡



25



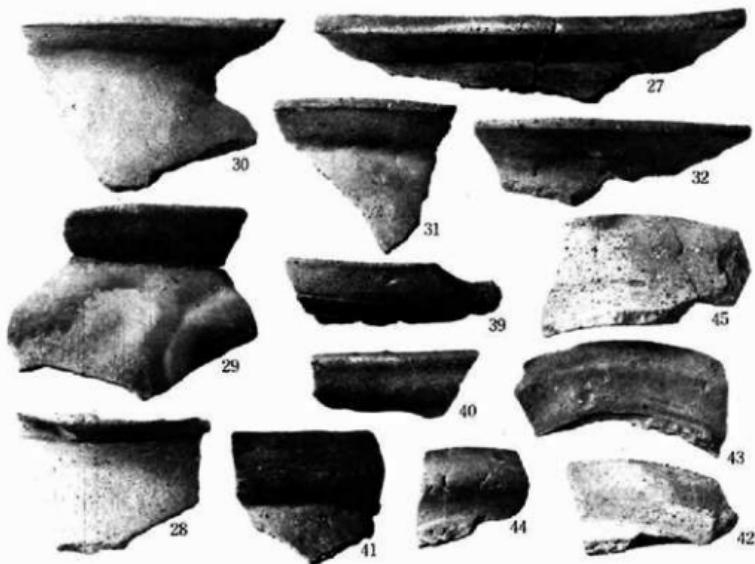
26



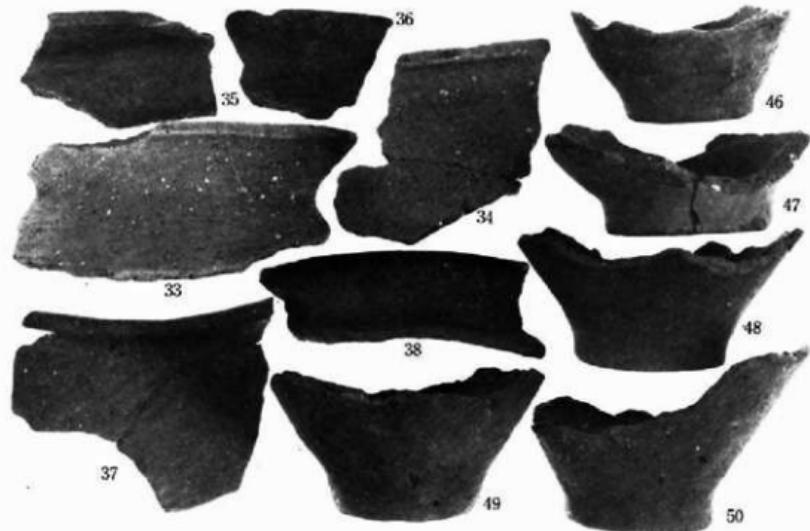
13

弥生式土器 (1:2・13のみ, 1:4)

図版7 鬼塚遺跡



弥生式土器 (1:2)



弥生式土器 (1:2)



63

弥生式土器 (1:2)



55

弥生式土器 (1:2)



56

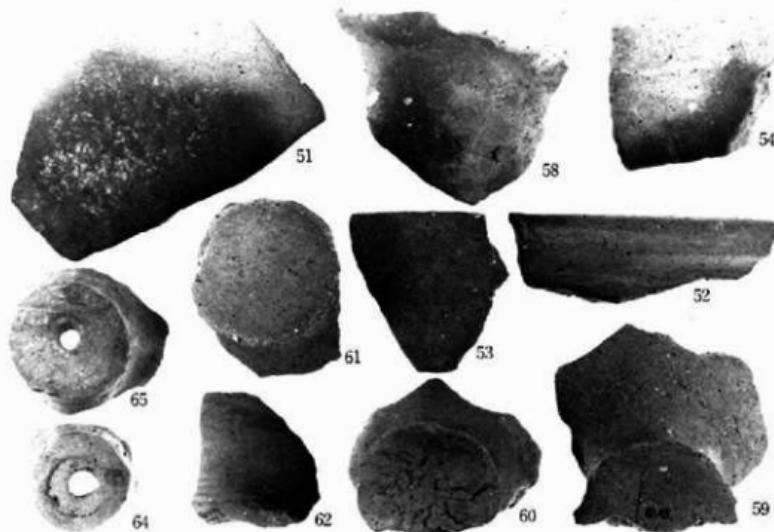
弥生式土器（1：2）



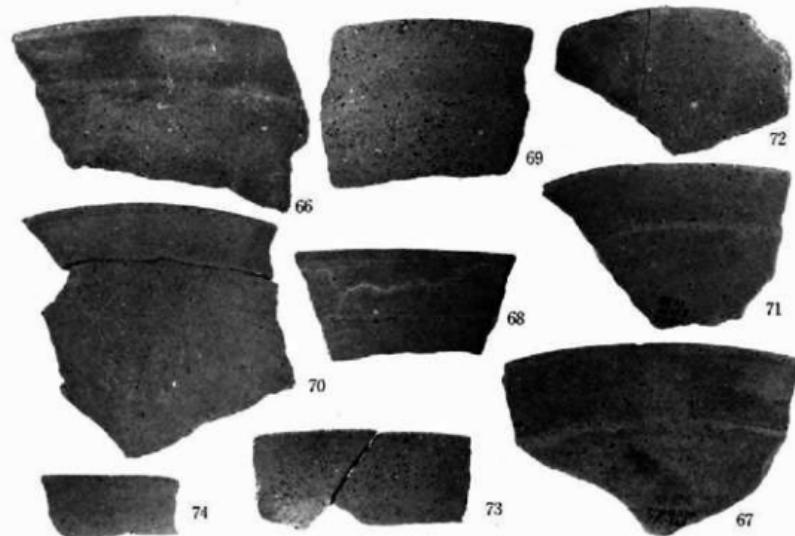
57

弥生式土器（1：2）

図版10 鬼塚遺跡



弥生式土器 (1 : 2)



弥生式土器 (1 : 2)



98



75



78



76



77



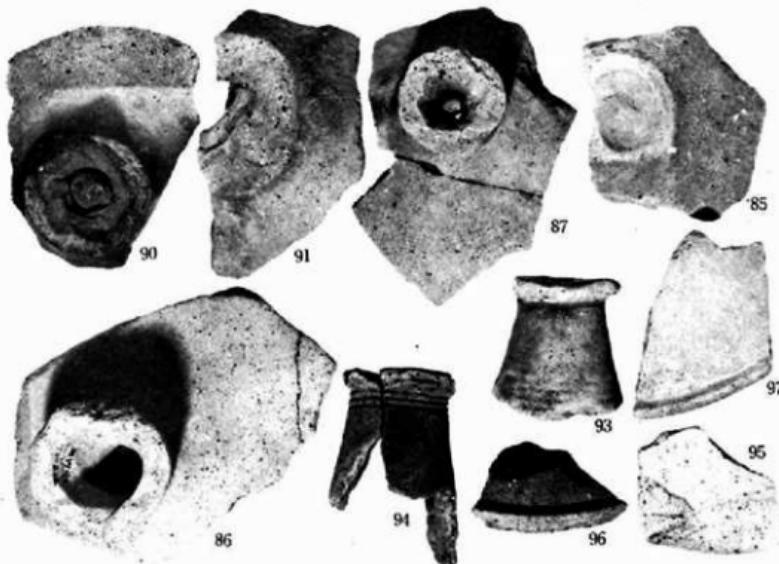
84

弥生式土器 (1:2・75のみ1:3)

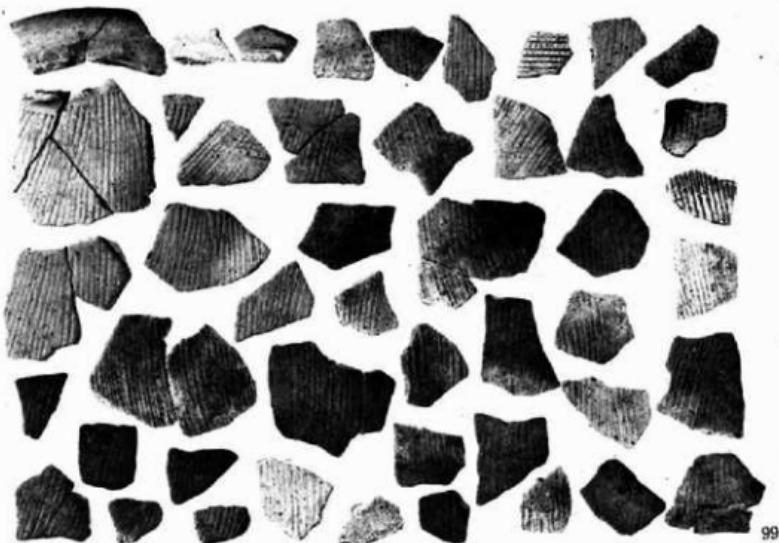
図版12 鬼塚遺跡



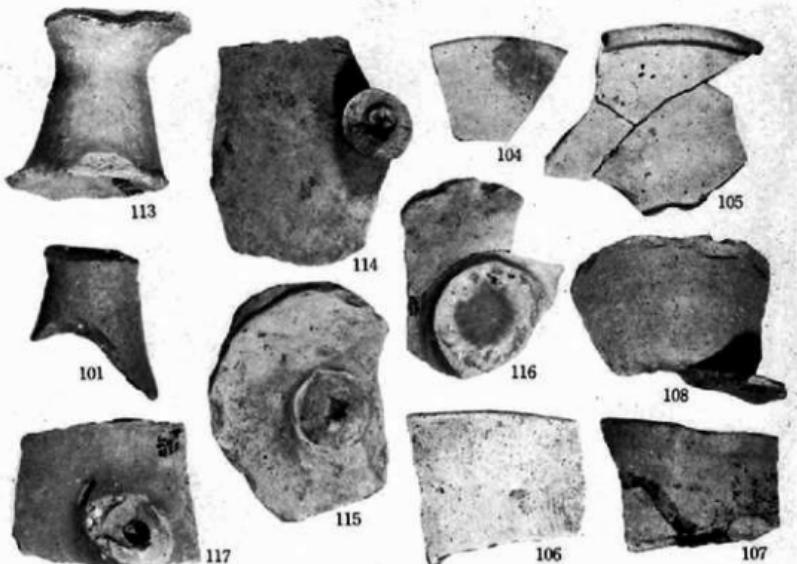
弥生式土器 (1:2)



弥生式土器 (1:2)



土器 (1:2)



土器 (1:2)

圖版14 鬼塚遺跡



弥生式土器 (1:4)



102



103

土師器 (1:2)



109



110



12



118



121

土師器・須恵器 (1:2)

120

119

岩 田 遺 跡



S.1 トレンチ東壁



S.1 トレンチ西壁

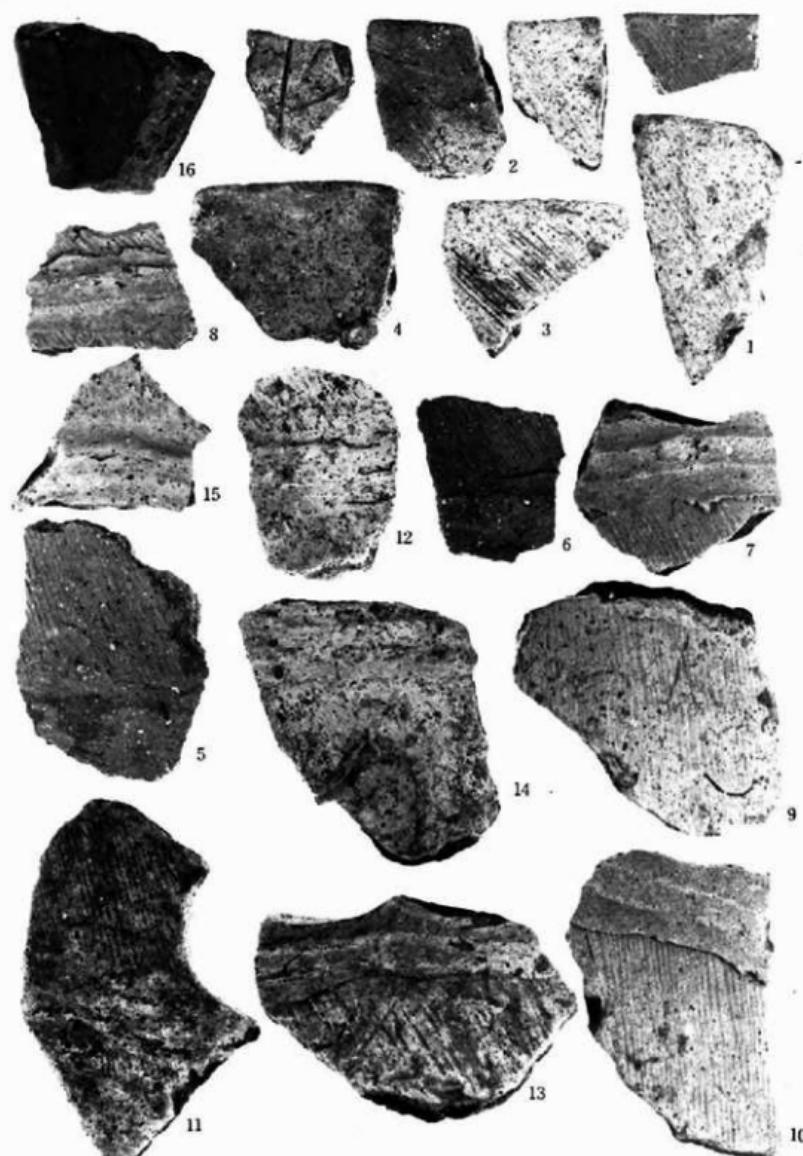
図版16 岩田遺跡



S.I トレンチ、ピット群（西より）



S.I トレンチ、瓦器小皿出土状況



円筒埴輪、平瓦(16) (1:2)

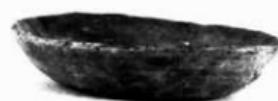
図版18 岩田遺跡



土師器、黒色土器、瓦器 (1:2)



灰釉陶器 (1:2)



瓦器 (1:2)

上六万寺遺跡

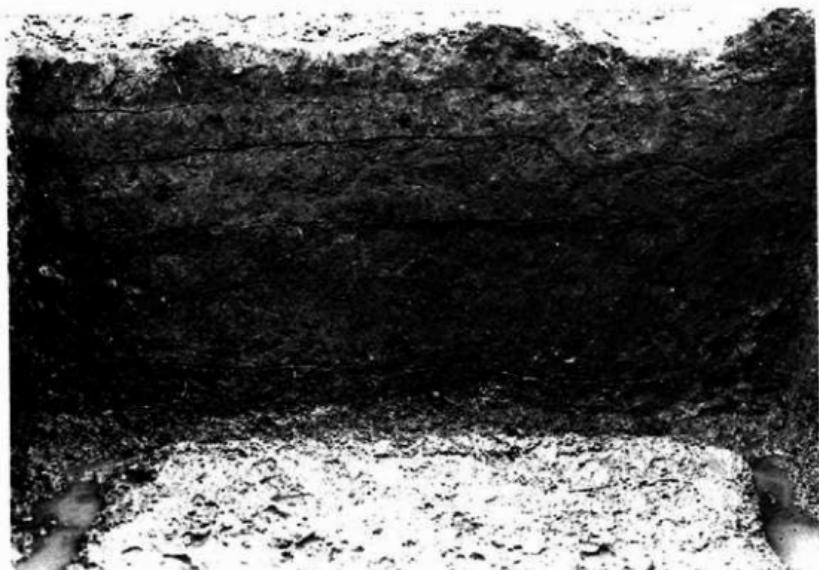


調査地点全景（北東より）



第1トレンチ北壁

図版20 上六万寺遺跡



第1トレンチ西壁



第3トレンチ西壁



第2 トレンチ石組井戸全景（北西より）



第2 トレンチ石組井戸全景（東より）

図版22 上六万寺遺跡



第2 トレンチ石組井戸内部（西より）



第2 トレンチ鉄釘出土状況（南より）



2

弥生式土器 (1 : 2)



17

弥生式土器 (1 : 2)



16



18



14



15

弥生式土器 (1:2)

圖版25 上六万寺遺跡



20



38



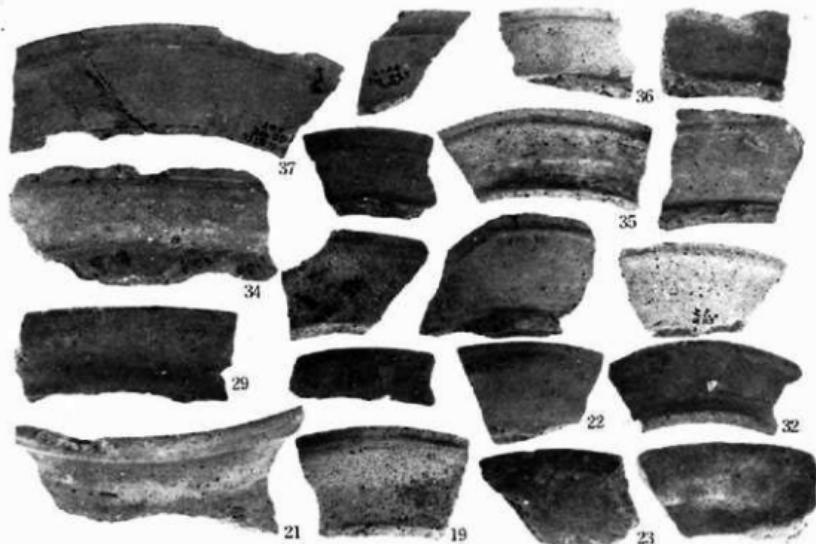
30



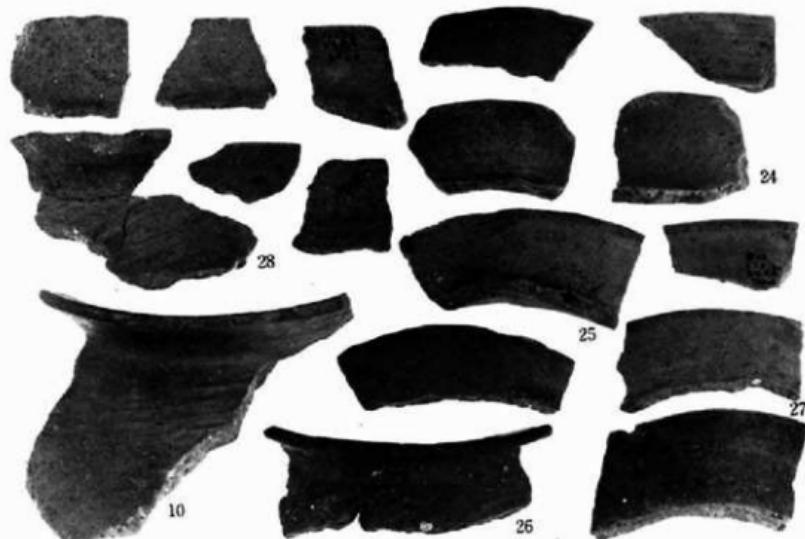
13

弥生式土器 (1:2)

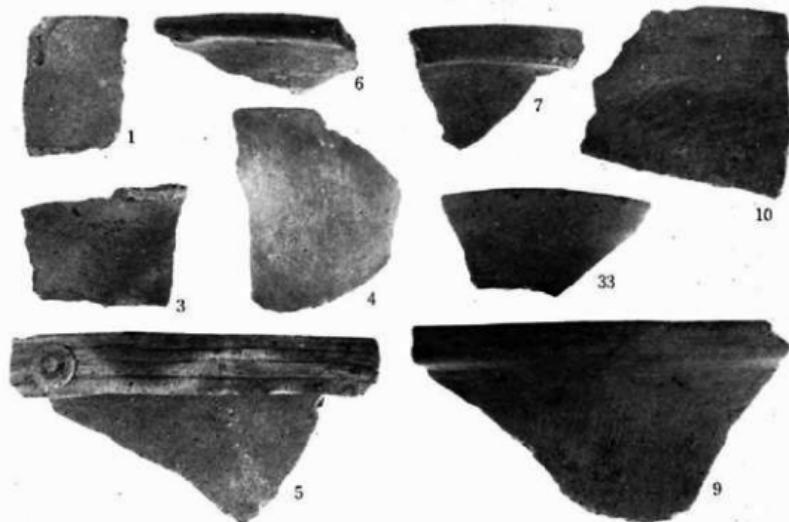
図版26 上六万寺遺跡



弥生式土器 (1:2)



弥生式土器 (1:2)

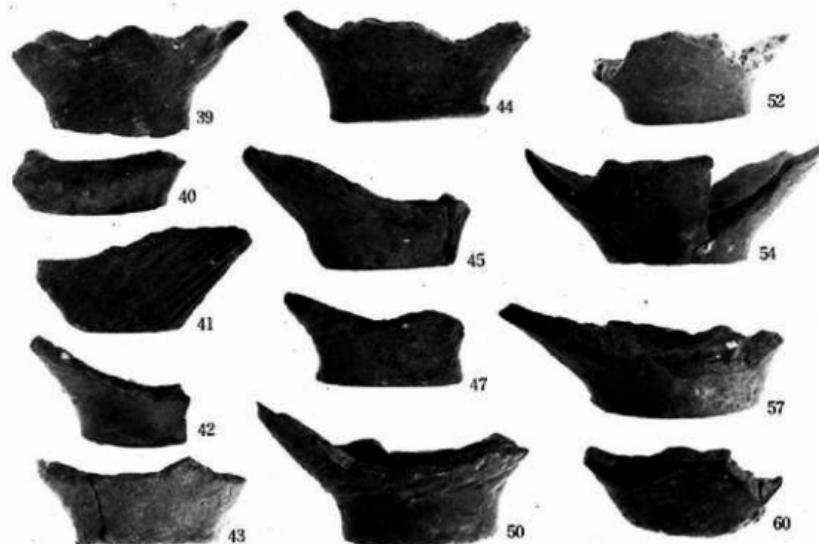


弥生式土器 (1:2)

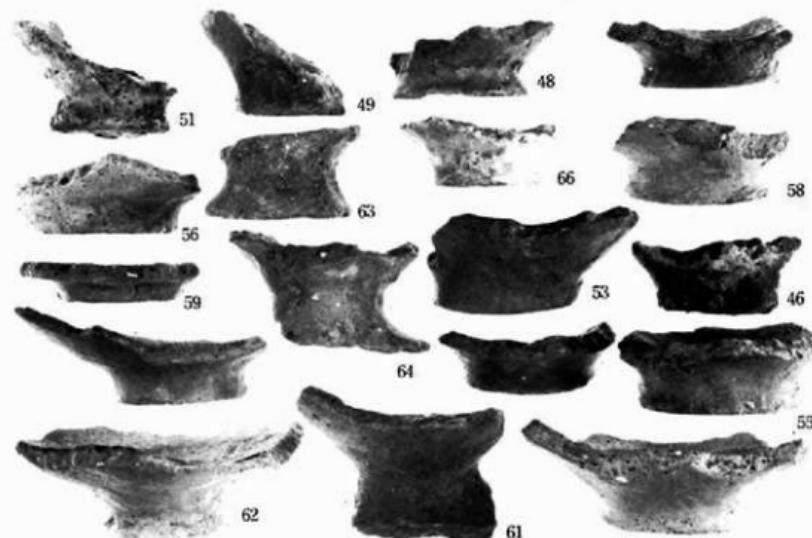


弥生式土器 (1:2)

図版28 上六万寺遺跡



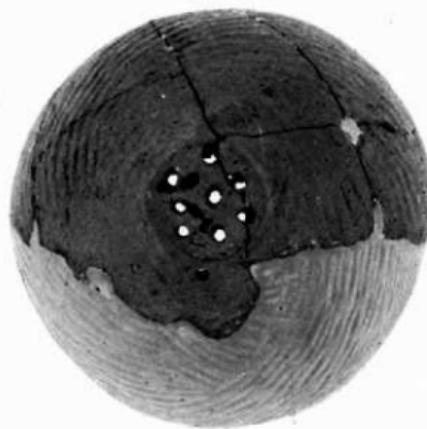
弥生式土器 (1 : 2)



弥生式土器 (1 : 2)



|



12

弥生式土器 (1:2)

圖版30 上六万寺遺跡



70



65

弥生式土器 (1:2)



11

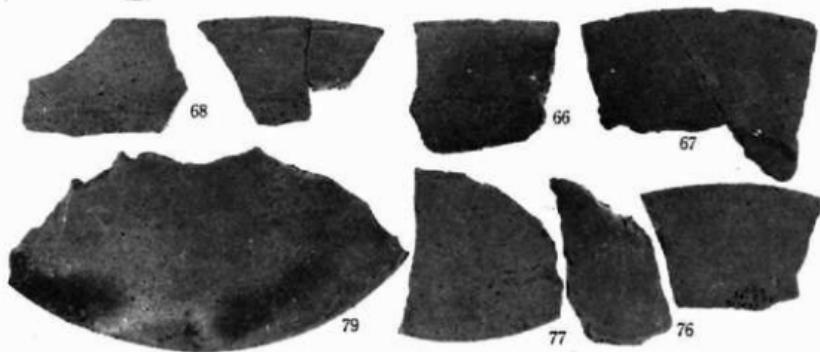
弥生式土器 (1:4)



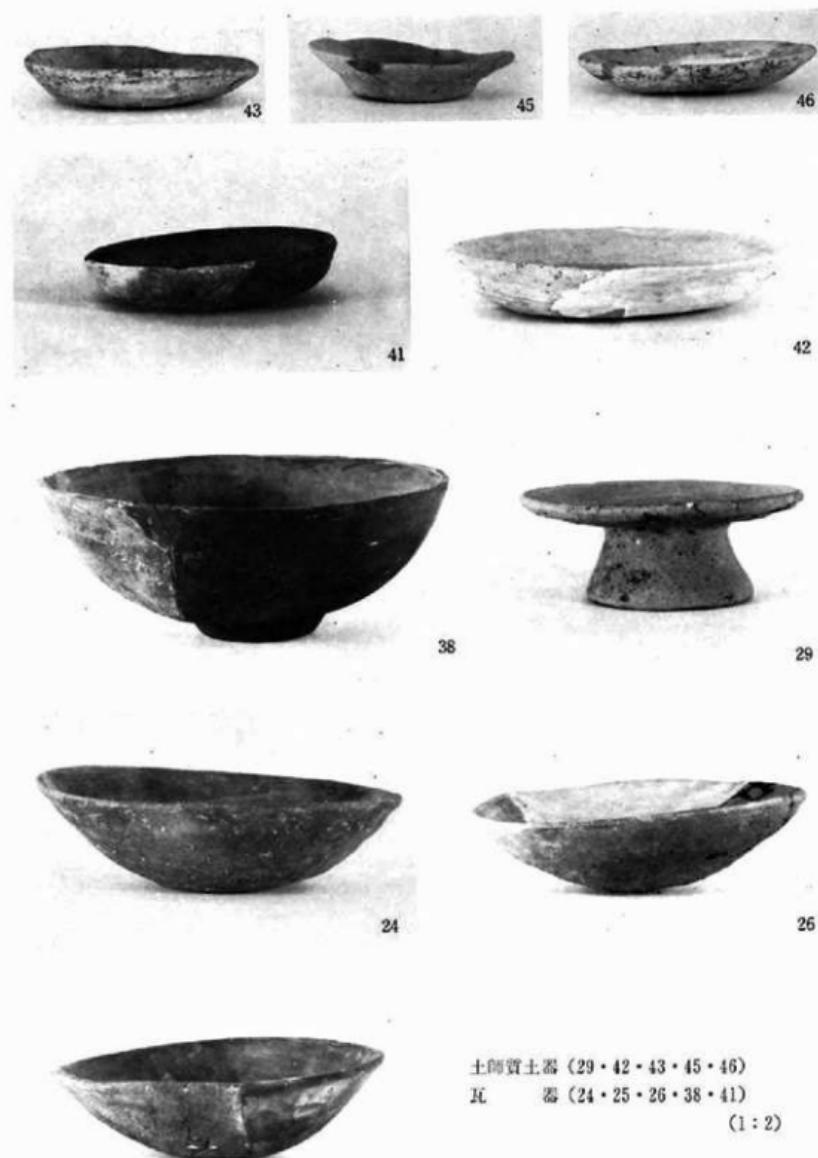
8

弥生式土器 (1:2)

図版31 上六万寺遺跡



圖版32 上六万寺遺跡





瓦 器 (1:2)



瓦 器 (1:2)



11

瓦質土器 (1:3)



瓦質土器 (7・12・19)、土師質土器 (1:2)

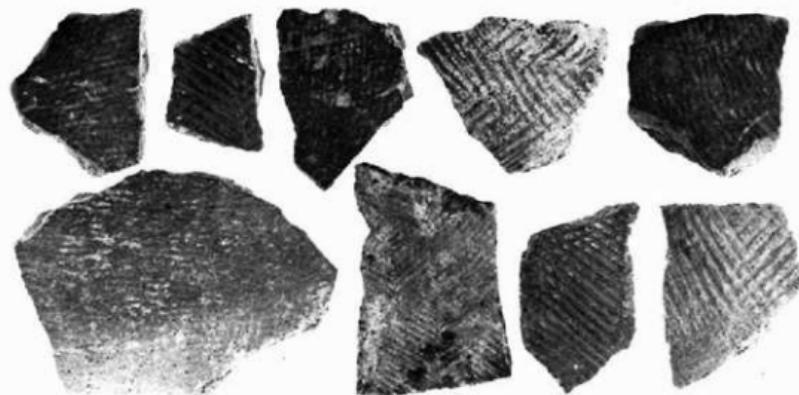


土師質土器 (1:2)



瓦質土器 (1:2)

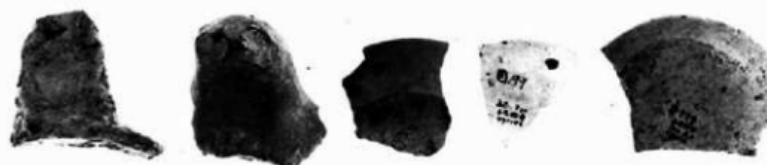
圖版36 上六万寺遺跡



瓦質土器 (1:2)



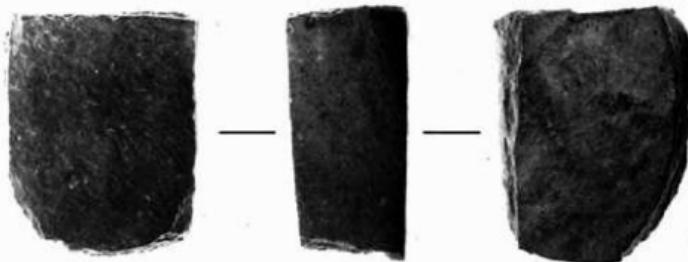
陶器他 (1:2)



土師質土器 (1:2)



50



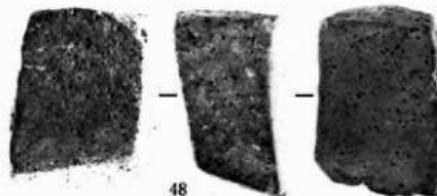
49



51

52

53



48

鉄製品 (1:2)



47

孤 石 (1:2)

